

熊本県本渡市文化財調査報告書 第5集

茂木根横穴群確認調査報告書

(附 先尾串石棺群現状確認調査報告書)

1988年

熊本県本渡市教育委員会

## 序 文

このたび本渡市文化財調査報告書 第5集の発刊の運びとなりました。

この調査報告書は天草島内でも数少ない箱式石棺群と茂木根横穴古墳群の調査記録をまとめた報告書です。

私たちのまわりには先人達がのこした文化遺産が散在いたしております。この貴重な遺産を保存、活用するため、今後も調査研究を進めて参りたいと考えます。

おわりに酷暑の中で調査に当っていただきました。諸先生方との調査に対しまして、特に側面からご協力をいただいた地権者の皆さまに深く感謝申し上げますと共に、この報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解のため、更にはまだ詳かでない天草の古代史の解明の上にいささかでも資するところがあれば幸甚に存じます。

昭和63年3月31日

本渡市教育長 吉野 隆三

## 例 言

1. 本報告書は昭和61年度に実施した熊本県本渡市本渡町大字広瀬字江古平 2322・2324 番地に所在する横穴群の現状確認調査報告書であり、附編として昭和59年度に実施した同市下浦町字先尾串2-2番地所在の箱式石棺群現状確認調査報告書を採録した。
2. 本書に使用した挿図は調査参加者が分担して作成し、写真は茂木根横穴群については池田栄史・竹田宏司、先尾串石棺群については平田豊弘が撮影した。
3. 本書に掲載した遺物はすべて本渡市教育委員会が保管している。
4. 本書の茂木根横穴については池田栄史が執筆し、先尾串石棺群については平田豊弘の草稿に池田栄史が加筆した。全体の編集は主に池田栄史があたり、長嶋孝吉・平田豊弘が補足・監修した。

## 本 文 目 次

序 文	本渡市教育長 吉野 隆三
例 言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
〔1〕茂木根横穴群確認調査報告書	1
1. 調査にいたるまで	1
2. 地理的・歴史的環境	2
3. 調査の概要	4
4. 調査	6
(1) 東支群	6
(2) 西支群	12
5. 調査のまとめ	16
6. 考察	18
(A) 茂木根横穴群周辺の古墳について	18
(B) 天草諸島における横穴について	23
〔2〕先尾串箱式石棺群現状確認調査報告	27
1. はじめに	27
2. 遺跡の位置	28
3. 調査の概要	30
4. 調査	31
5. まとめ	40

あとがき

### 掲　図　目　次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	茂木根横穴群周辺地形測量図	7
第3図	茂木根横穴群1号横穴実測図	9
第4図	茂木根横穴群2号横穴出土須恵器実測図	10
第5図	茂木根横穴群2号横穴実測図	11
第6図	茂木根横穴群4号横穴実測図	13
第7図	茂木根横穴群4号横穴出土遺物実測図	15
第8図	明瀬平鬼塚古墳周辺採集遺物実測図	19
第9図	善坪横穴出土遺物実測図	20
第10図	丸尾ヶ丘出土勾玉実測図	21
第11図	田畠横穴出土土器実測図	23
第12図	田畠横穴出土遺物実測図	24
第13図	鹿児島県長島町浜瀬横穴実測図	25
第14図	先尾串箱式石棺群周辺地形測量図	29
第15図	先尾串箱式石棺群1・2号実測図	32
第16図	先尾串箱式石棺群3・4号実測図	33
第17図	先尾串箱式石棺群5・6号実測図	35
第18図	先尾串箱式石棺群7・8号実測図	36
第19図	先尾串箱式石棺群9号・蓋石実測図	37
第20図	新和町櫻の浦箱式石棺群地形測量図	38
第21図	新和町櫻の浦箱式石棺群実測図	39

### 図　版　目　次

第1図版	茂木根横穴群	(上) 遠景	(下) 東支群現状
第2図版	茂木根横穴群	(上) 2号横穴現状	(下) 4号横穴現状
第3図版	茂木根横穴群東支群	(上) 1号横穴完掘状況	(下) 1号横穴玄室
第4図版	茂木根横穴群東支群	(上) 2号横穴完掘状況	(下) 2号横穴玄室敷石
第5図版	茂木根横穴群西支群	(上) 4号横穴完掘状況	(下) 4号横穴玄室床面
第6図版	茂木根横穴群調査終了後	(上) 東支群	(下) 西支群4号横穴
第7図版	茂木根横穴群出土遺物		
第8図版	明瀬平鬼塚古墳・善坪横穴・丸尾ヶ丘出土遺物		
第9図版	田畠横穴群遠景および出土遺物		
第10図版	馬場横穴群遠景・近景	鹿児島県長島町浜瀬横穴遠景・近景	
第11図版	先尾串箱式石棺群	(上) 遠景	(下) 近景
第12図版	先尾串箱式石棺群および蓋石確認状況		
第13図版	新和町櫻の浦箱式石棺群	(上) 遠景	(下) 近景
第14図版	新和町櫻の浦箱式石棺群確認状況		

## 【1】 茂木根横穴群確認調査報告

### 1. 調査にいたるまで

熊本県天草は九州西岸に位置する大小百数十の島々からなる。西海に浮かぶ天草の島々は古くから風光明媚で知られ、頼山陽の詩歌にも詠われている。本渡市はこの天草群島の中でも最大の天草下島と二番目に大きい上島を結ぶ要の地点に位置する。この地理的な特徴もあって、市内には天草を全国的に知らしめた中・近世のキリスト教関係史跡をはじめ、多くの文化財が分布している。本渡市ではこれらの文化財についてその保護・活用を図るため、かねてより分布・確認調査を実施してきたが、昭和61年度にはその一環として市内茂木根所在の横穴群4基について確認調査を実施することとなった。

調査は熊本県教育庁文化課の指導のもと、本渡市教育委員会が主体となり、熊本大学文化財研究会・琉球大学学生等の参加を得て実施した。

#### 調査組織

本渡市教育委員会	教育長	吉野 隆三
	社会教育課長	黒川幸二郎（当時）
		松本 守（現在）
	文化係長	長嶋 孝吉
本渡市立歴史民俗資料館	館長	仁田 長政
	学芸員	本田 康二
本渡市立天草キリストン館	学芸員	平田 豊弘
調査員		
琉球大学法文学部	助手	池田 栄史
九州女学院高校	講師	竹田 宏司

#### 調査補助員

荒川博文・広松秀子・有富英明・国見直樹・井上信之・上野晶子・岩野直美・中田大二郎・森園靖浩（熊本大学文化財研究会）

国吉菜津子（琉球大学法文学部学生）・原嶋友子・平嶋美和子（九州女学院高校生徒）

#### 作業員

田口ツヤ子・島崎和枝

#### 調査指導

熊本県教育庁文化課技師 松本 健郎

なお、調査にあたっては調査地主の金子平市・池田武史・金子継男氏をはじめとして、鹿児島大学法文学部教授上村俊雄先生の多大の御協力をいただいた。記して謝意を表します。

## 2. 地理的・歴史的環境

熊本県天草諸島は九州西岸の内側ともいるべき位置に連なる大小百数十の島々からなる。これらの島々の中で最大の島は下島であり、これと狭い瀬戸を挟んだ東側に次に大きい上島が位置する。上島と九州本土から延びる宇土半島の間には大矢野島をはじめとする数十の島々が点在し、ここに九州本土と天草を結ぶ天草五橋が構架されている。これらの島々の大半は山がすぐ海に迫るアリス式海岸であり、河川に沿って小平地が海沿いに多く開けている。近世以前の天草ではこの河川毎の小平地がそれぞれ独立した村落を形成していたと考えられる。かつての各平地毎の主要交通路は海であり、中でも宇土半島から下島までにいたる間の各瀬戸はそれ各自の小平地を結ぶばかりでなく、有明海と八代海を結ぶ海上交通上の要路でもあった。

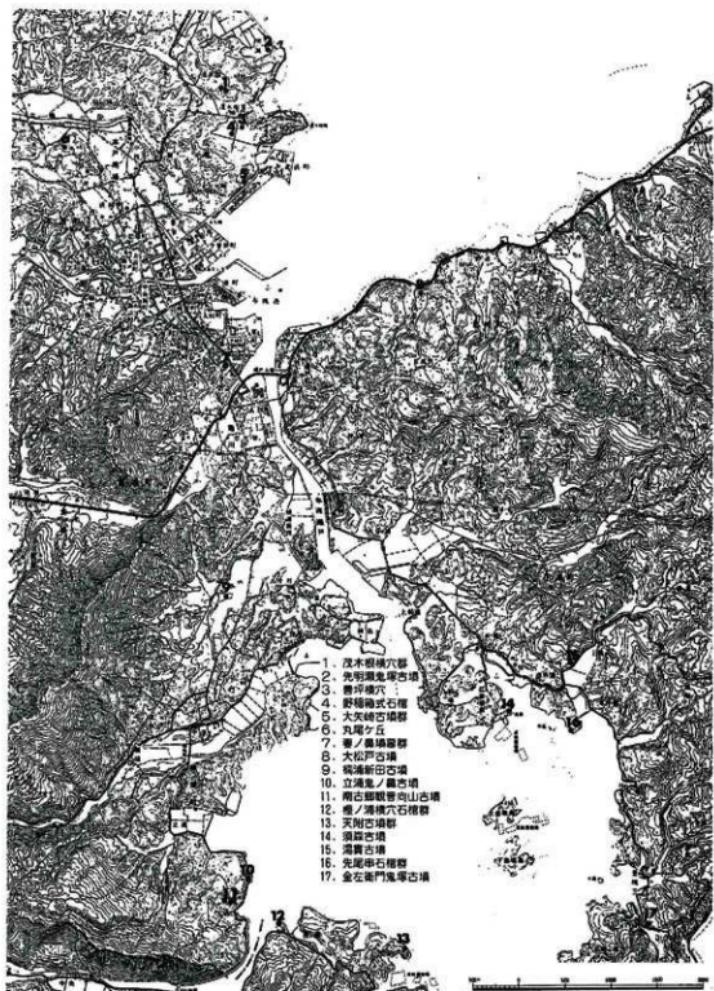
茂木根横穴群が位置する本渡市茂木根地区は下島に流れる小河川に沿って開けた谷合いの平地の一つであり、小さな尾根を越えると下島と上島を結ぶ瀬戸舟便に発展した本渡市の市街地が広がる。水便の良い谷の低平地は水田、やや高地は畑地として有効に利用され、近年は圃場整備も進みつつある。

茂木根横穴群は小河川の河口から500m程遡ったあたりのこれらの谷間を見下ろす尾根の斜面に分布している。尾根は全体に凝灰岩質の岩盤であり、大半は灌木林となっている。

茂木根横穴群が分布する谷合いの小平地には茂木根横穴群の他にもいくつかの古墳および横穴が分布している。既に破壊され現存していないが、茂木根横穴群と川を挟んだ対岸の字善坪に横穴一基、五反田に石室墳らしきものが確認されている。また、茂木根横穴群が立地する尾根の海に突き出た一文の斜面、字明願平には石室墳一基が分布する。さらに尾根を越えた字大矢崎にも既に破壊されているが、古墳らしき墳丘2基があったという。

茂木根地区から目を転じて、海を挟んだ対岸の志布には横穴式石室墳の大松道古墳があり、下島の瀬戸を見下ろす字亀川尻の小丘上には地下式板石積み石室35基余りからなる妻の鼻墳墓群が分布していた。妻の鼻墳墓群は昭和40年に調査され、その後茂木根横穴群が立地する尾根の海に突き出た先端部に移築されている。

本渡瀬戸を通じて八代海側では横穴式石室墳の楠浦鬼塚古墳・立浦鬼の鼻古墳・南古郷觀音向山古墳・下浦須森古墳・湯貫新田古墳・金左衛門鬼塚古墳・箱式石棺墓数基からなる先尾串石棺群がある。なお、この他に南古郷觀音向山古墳の近くには2基の古墳があったというが、現地では確認できない。



第1図 周辺遺跡分布図

### 3. 調査の概要

調査は昭和61年7月21日より8月2日までの間に実施した。今調査の目的が茂木根横穴群の確認調査であることから、調査にあたっては現状を変更しないことを前提とし、調査終了後旧状に復して埋め戻しを行った。以下、調査日誌に基づいて調査の概要を述べる。

昭和61年7月21日（月）

午前中、本渡市役所にて調査の打ち合わせを行う。まず、本渡市教育長より挨拶があり、次いで社会教育課長及び係長から調査についての諸注意があった。その後、調査参加者の自己紹介と日程の確認があった。終了後、各自の荷物を宿舎に搬入し、昼食を取った。

午後から参加者の女子は宿舎の整備、男子は横穴群の現地確認と三角点からの測量レベルの移動を行った。

7月22日（火）

今日から本格的な調査を行う。まず、現地で今後の調査の進め方について話し合う。その結果、横穴群4基は2基ずつ2ヶ所に別れて分布するため、仮に東側の2基を1・2号、西側の2基を3・4号とし、調査は東支群の1・2号から取りかかることにする。各横穴の現状写真を撮影するとともに、周辺地形の測量図作成を始める。午後より1・2号についてグリッドを設定し、横穴の開口部半分について表土の掘り下げを行った。

7月23日（水）

前日に引き続いて1・2号の開口部掘り下げと周辺地形の測量を行う。午前中に掘り下げが終了したので写真をとり、その後セクション図を作成する。なお、掘り下げの際2号から須恵器焼片1点が検出された。午後より開口部の残り半分と玄室内の半分について掘り下げを行う。周辺地域の地形測量については昨日の作業を継続する。

7月24日（木）

昨夜来の雨により足場が悪いため、午前中の作業を中止する。日中より天気も回復したため玄室および開口部に溜まった雨水の汲み上げを行う。また、地形測量については昨日の作業を継続し、ほぼ終了する。熊本県文化課より調査指導のため、松本健郎氏が見えられる。

7月25日（金）

1号については玄室内の堆積土が少なかったため、清掃および写真撮影後玄室内堆積土のセクション図をとり、玄室の残り半分側を掘り下げる。夕刻までに掘り下げ終了。

これに対して、2号では玄室内の堆積土が厚かった上に一昨日来の雨のためか玄室壁面からの湧水が激しく、掘り下げに手間取る。なお、玄室内が暗いため投光器を活用する。

鹿児島大学法文学部教授上村俊雄先生が調査見学に見えられる。

7月26日（土）

1号は清掃後写真撮影を行い、実測図の作成に取りかかる。2号は玄室半分および開口部残り半分の掘り下げを続ける。相変わらず湧水に悩まされ、作業に手間取る。玄室内堆積土30cm程を掘り下がった段階で敷石敷の床面が現れ始める。

なお、今日より西支群についても調査を始める。西支群3・4号のうち、3号はその大半が埋没しており保存状態も良さそうであったのに対し、4号は玄室内に多量の紙屑が捨てられるなどしていた。このため、今回の調査では保存状態の良い3号には手を付けず、清掃の意味も含めて4号のみ調査することとし、4号の開口部半分の掘り下げに取りかかる。

7月27日（日）

1号は午前中に一応の図面作業を終了。2号は前日に引き続き、玄室内半分を掘り下げる。床面の敷石を露出させた段階で、写真撮影を行う。4号は横穴開口部半分の掘り下げを終り、続いて玄室内半分を掘り下げる。なお、今日で参加学生の大半が引き上げるため午後の作業は中止し、宿舎の清掃と後片づけを行う。

7月28日（月）

1号は完成した図面の確認を行う。2号は玄室のセクション図を作成する。4号はセクション図を作成した後、写真撮影を行う。なお、今日から人員が少ないため午後は全員で4号の掘り下げを行う。4号開口部から近世磁器片多数が出土する。4号掘り下げ終了。

7月29日（火）

2号は玄室の残り半分を掘り下げる。相変わらず湧水が激しく、作業に手間取る。4号は写真を撮り、実測に着手する。

7月30日（水）

2号の掘り下げ終了。写真撮影の後、実測図の作成に入る。4号も実測作業を継続する。本渡市文化財保護委員の皆さんのが調査の視察に見える。

7月31日（木）

昨日に引き続き、2・4号とも玄室実測を行う。4号の実測が終了する。本渡市教育長吉野隆三氏現地視察に見える。

8月1日（金）

午前9時より地元の方々の現地説明会を開く。小・中学生を中心に20数名の参加がある。

午後より2号の玄室実測、および4号実測図の確認を行う。

8月2日（土）

午前中、一昨日実測の終了した4号の埋め戻しを行う。この間に2号の実測も終了する。午後から1・2号の埋め戻しを行い、調査を終了する。

#### 4. 調査

茂木根横穴群は熊本県本渡市茂木根江古平に所在する横穴群であり、現在4基が確認されている。横穴は海に向かって東に延びた尾根から別れて南に延びる二本の枝尾根の東斜面に、2基ずつ並んで分布する。ともに主尾根から枝尾根が分岐する地点あたり、今回の調査では海に近い東側の横穴2基を東支群、西側の2基を西支群とした。東支群は標高23m、西支群は標高26mあたりに位置する。また、各横穴の呼称については東支群2基のうち枝尾根の先端側（南側）の横穴を1号、主尾根との分岐点側（北側）の横穴を2号、西支群も同様に枝尾根の先端側の横穴を3号、主尾根との分岐点側の横穴を4号と仮称した。

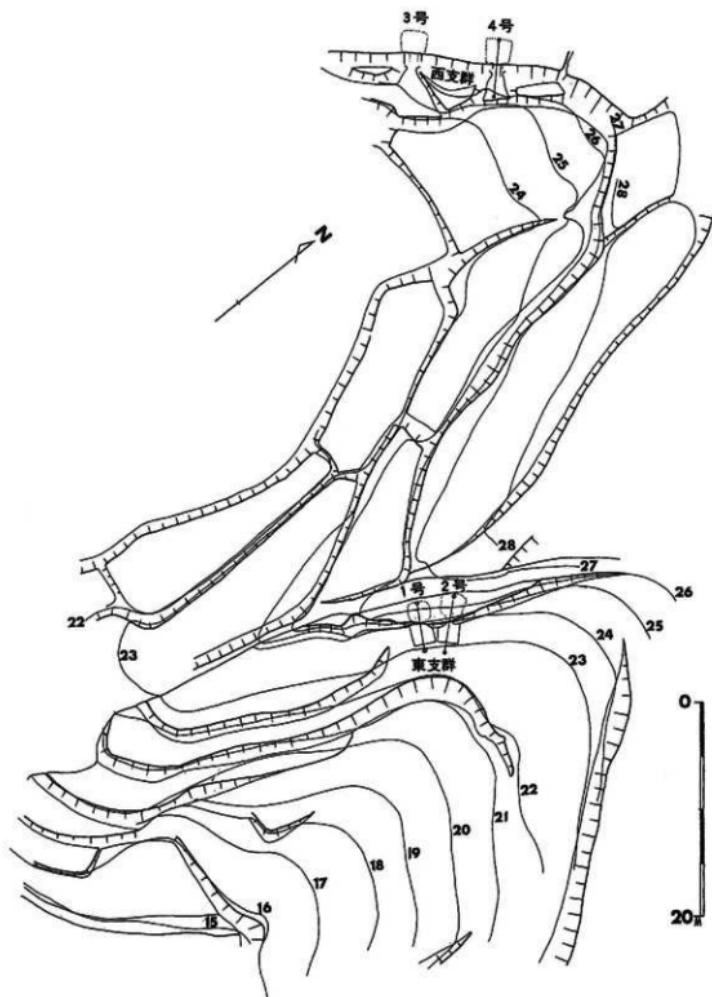
横穴4基の中で、東支群の1・2号は羨門部が崩落しつつあったのに対して、西支群の3・4号はかなり良好に遺存していた。そこで、今回の確認調査では横穴遺存状態確認の緊急性を考え、まず崩壊が進みつつある東支群1・2号について着手した。ついで西支群については4号のみを調査し、3号は現状のまま保存することとした。

なお、調査にあたってはまず横穴の玄室構造等から主軸方向を仮定し、次にこの主軸に沿って羨門部前方に任意の調査区を設定した。さらに調査区内の堆積土を主軸に沿った半分だけ掘り下げ、土層観察を行った後、さらに残り半分の堆積土を掘り下げ、実測図を作成する手順を取った。

##### (1) 東支群

東支群が位置する尾根の斜面は現在檜等の灌木林となっているが、以前には山肌を開墾した段々畑として耕作されていた。このため、尾根の斜面のいたる所は段々に掘削されており、横穴の周囲も例外ではない。ただ、横穴についてはなにかしかの配慮が働いていたようで、横穴が位置する斜面はその周辺に比べると比較的旧状を保っている。しかし、この配慮も横穴が掘り込まれている斜面のみであったらしく、横穴の前面は開口部の前方4mほどの所で段落ちが見られ、畠地として耕作されていたことが知れる。東支群2基の羨門部が崩落しつつあるのはあるいはこの耕作の影響かも知れない。

東支群2基のうち1号横穴は羨門部の大半が崩落し、日中は明かりなしで玄室内を観察できる程である。また、玄室内にほとんど土が堆積しておらず、後世の改変をかなり受けたものと考えられる。これに対して2号横穴は羨門部の一部に崩落が見られるものの玄室内は一面の堆積土で埋まっており、床面施設の遺存が期待された。



第2図 地形測量図（数値は標高を示す）

#### A、1号横穴

##### 遺構

1号横穴は玄室平面観が胴張りの略方形を呈する単室の横穴である。主軸方向はN-60°-Wで、南東方向に開口する。玄室は壁面がかなり剥落しているが、幅奥壁面160cm・羨門側130cm・中央最大部180cm・奥行き約150cmを測る。床面は奥壁側が幾分高く盛り上がって見えるが屍床その他の明確な施設はなく、ほとんど平らで中央部がやや盛んでいる。本来何らかの施設が作られていたものと考えられるが、おそらくは後世の改変によって削られたものであろう。床面の標高は23.4mを測る。玄室天井部は妻入りのゆるやかな蒲鉾状のドーム形に造られており、四壁にわずかながら稜線が見られる。玄室高奥壁左右で約70cm・奥壁中央で90cm・羨門側左右で約60cm・石室中央部で110cmを測り、羨門側中央部は崩落のため計測できない。

羨門部およびその前方については主軸に沿って幅2mの任意の調査区を設定した。しかし、羨門部は向かって右側の一部が残存しているもののほとんど崩れ落ち、旧状を知ることはできない。また、羨門の前面も玄室床面から急傾斜をなして50cm程掘り下げられており、この部分の堆積土は地山の凝灰岩岩盤の上に薄く存在する地山風化層を除けば均質である。先に地形観察の上から本横穴の前面は段々畑として耕作されていた可能性を指摘したが、1号羨門部前方の堆積土層はこの際の耕作土と考えられる。このことからすれば1号横穴の羨門部より前方は耕作によって掘削され、ほとんど旧状を留めていないものと考えられる。

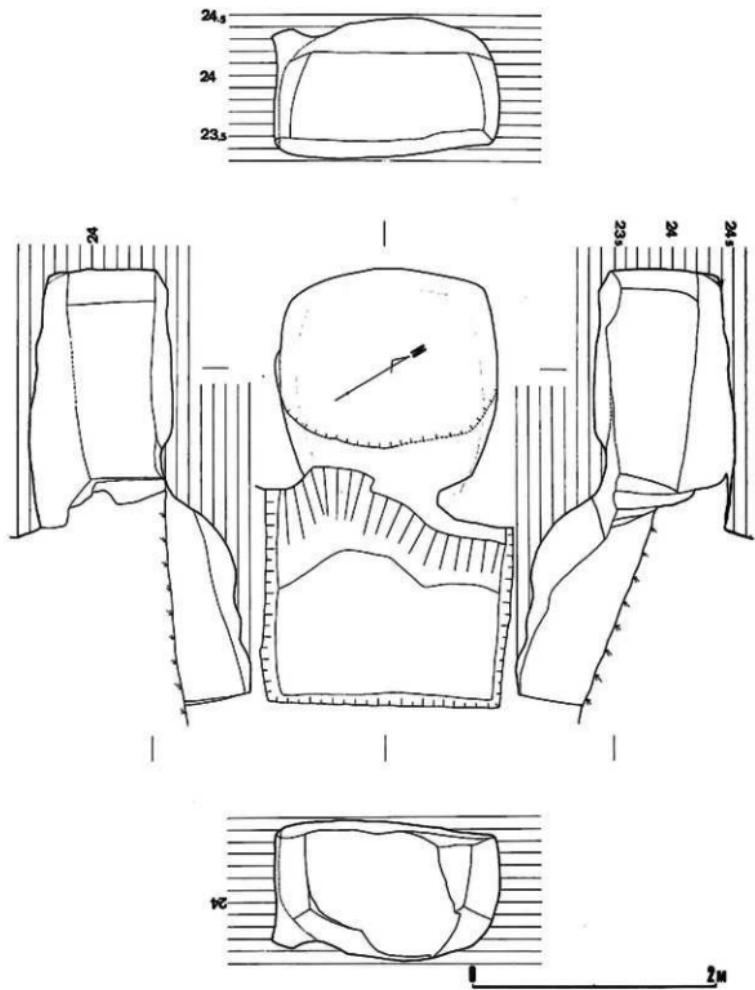
なお、本横穴からの遺物は確認できなかった。

#### B、2号横穴

##### 遺構

2号横穴は1号横穴の3mほど隣に並んで南東に開口し、主軸方向はN-41°-Wを測る。玄室内に厚さ40cmあまりの堆積土があった上、雨後には壁面から湧水が激しく、作業に手間取った。

玄室は平面観略方形を呈するが、壁面下部の崩落が激しく、特に奥壁側では歪に膨らんでいる。崩落部分を除いた玄室壁面の様相から玄室の旧状を想定すれば、幅奥壁側約190cm・羨門側170cm・奥行約200cmを測る。天井部は1号横穴と同じく妻入りのゆるやかな蒲鉾状のドーム形を呈し、玄室高は玄室の四角でそれぞれ70cmあまり、玄室中央奥壁側で80cm・玄室中央および羨門側で約100cmを測る。床面には10~20cm大の礫石を敷き詰め礫床としているが、現存する礫床の石材はまばらな部分もあり、後世にいくらか抜かれた可能性が強い。なお、礫床は羨門部に向かって「コ」の字型に配されており、「コ」の字の内部には礫石を敷かず一段低い地山の凝灰岩を露出させている。礫床の標高は23.1m、一段低い地山露出部との比高差は約20



第3図 1号横穴実測図 (1/40) (数値は標高を示す)

cmを測る。

なお、1号横穴と2号横穴の玄室床面の標高差は約30cmであるが、雨上がりの後1号横穴ではほとんど見られないのに対して2号横穴では激しい湧水が見られた。隣合った2基の横穴における立地上の違いはこの30cm余りの標高差しかないとからすれば、この30cmの間に地山である凝灰岩層の通水層があったものと考えられる。2号横穴の玄室壁面下部の崩落が激しいことや床面を礫床にしたことなどは、あるいはこの通水層の影響であり、また対策であったのかも知れない。

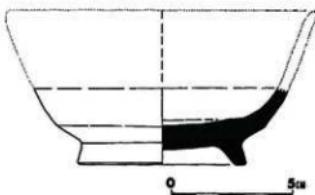
玄室につづく羨門部でも壁面下部の崩落が激しく、天井と床面近くのみが一部残存する。床面は幅約60cm・奥行約70cm、天井部は幅約40cm・奥行約30cm・高さ約95cmを測る。羨門部天井は玄室天井部から真っ直ぐに延び、床面も玄室内部の凝灰岩露出部分からなだらかに下降する。ただ、羨門床面の玄室際には幅約45cm・奥行約20cm・厚さ約6cmの敷居石にも似た石材を配置している。この石材は羨門部床面より10cmほど高い位置にある。

横穴開口部は羨門から左右へ大きく開き、床面は羨門部から引き続き緩やかに下降する。開口部に堆積した土は1号横穴と同じく地山の変質土であり、やはり耕作によって擾乱されたと考えられるが、床面の地山は傾斜から見る限りそれほど掘削された形跡はなく、比較的旧状を保っているものと考えられる。

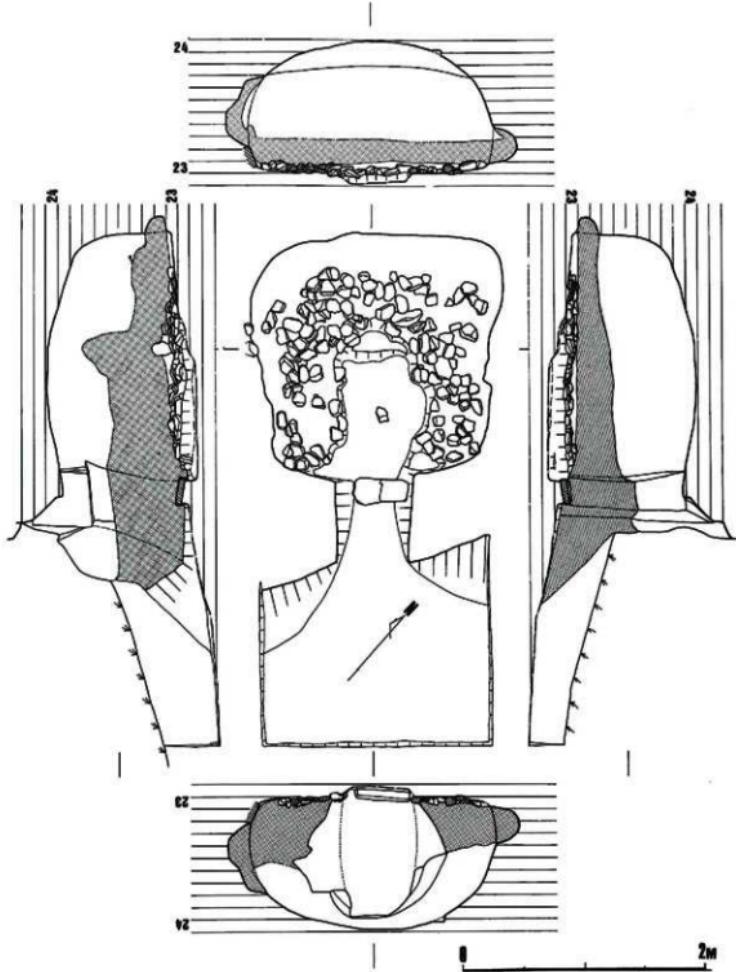
本横穴からは開口部の表土を掘り下げる際に須恵器高台付塊片が検出された。

#### 遺物

出土した須恵器高台付塊破片は口縁部を欠くが、現存部高3.1cm、高台径7cmを測る。「ハ」の字型に開いた高台から緩やかに口縁部が立ち上がり、屈曲部には僅かな稜がみられる。底部はやや丸底氣味を呈し、高台内がヘラ削りされている他は丁寧にロクロナデ成形される。胎土は白色石粒を含むが緻密で、焼成も良好、青灰色を呈する。



第4図 2号横穴出土須恵器実測図(1/2)



第5図 2号横穴実測図(1/40)(アミ部分は崩落部分)

## (2) 西支群

西支群が位置する尾根は東支群が位置する尾根の隣に当たり、横穴群相互の距離は約55mである。横穴の周辺は東支群と同じく灌木林となっているが、かっては段々畑として耕作されていた段の跡が残っている。なお、現在尾根の反対斜面ではこれらの段々畑を牛の放牧場として利用している。

西支群2基についても開墾に際しては何らかの配慮が働いたものらしく、横穴とその周辺部についてはあまり手が加えられていない。しかし、2基の開口部前方3mあまりの所で段々畑の大きな段落ちがみられ、墓道についてはここで切断されている。

調査以前の表面観察によって西支群の2基は良く似た構造であることが知れた。しかし、2基のうち、3号横穴は羨門部に人一人がやっと入れる位の隙間があいており玄室内もほとんど土で埋まっていたのに対して、4号横穴は羨門部の半分ほどが開口していた。また、玄室の床面はかなりの水が溜まっていたものの露出し、さらには焚き火等をした痕跡も見られた。そこで今回の調査では保存状態の良い3号横穴は現状のまま手をつけず、4号横穴のみを確認調査した。

### A、4号横穴

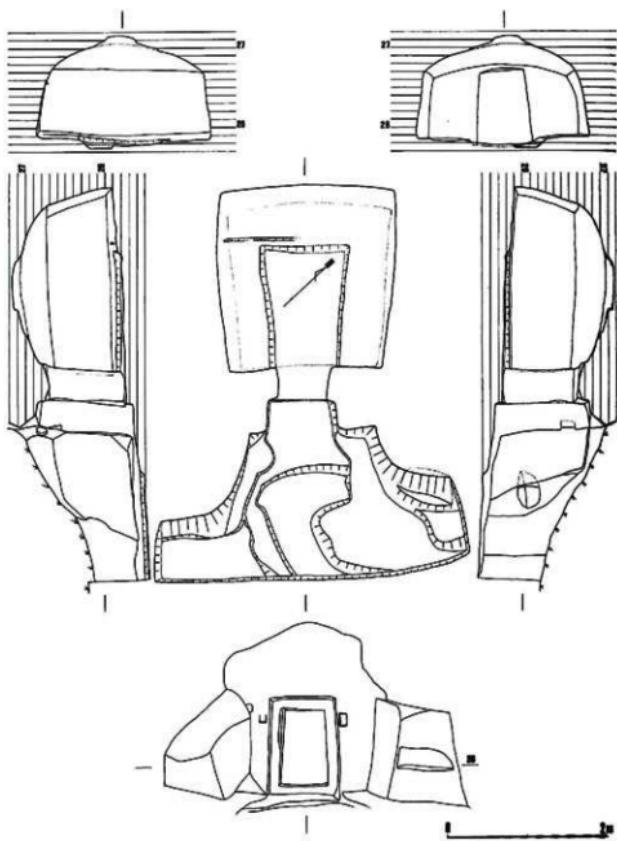
#### 遺構

4号横穴も東支群2基と同じく東南方面に開口する単室の横穴である。主軸方向はN-47°Wを測る。

玄室の平面観は奥行きの長い略方形を呈し、四壁の角は鋭角をなす。幅奥壁側215cm・羨門側190cm・奥行230cmを測る。床面は羨門側に向けて「コ」の字型の屍床が掘り込まれており、「コ」の字の内部は一段低く羨門部へと続いている。屍床は奥壁寄りの一区が少し高く作られ、一部にはやや盛り上がった仕切りの痕跡が見られる。奥壁側の屍床は仕切りを含めて幅約75cm、左右の屍床はそれぞれ幅約50cmを測る。玄室床面の標高は奥屍床で25.9mで、開口部へ向けて徐々に低くなる。天井部は妻入りの緩やかな蒲鉾状のドーム形であるが天井部全体はやや円錐状に削られており、四壁には稜線が走る。なお、天井中央には直径50cm程の剥落部分があり、ここには焚き火による煤が付着している。天井部までの高さは奥壁両端で75cm、羨門側両端で80cm、奥壁中央で85cm、羨門側壁面中央で105cm、玄室中央で約130cmを測る。

羨門部は外から見れば長方形に彫り抜かれ、幅約65cm・奥行40cm・高さ95cmを測る。羨門入口側には羨門をさらに10cm余りずつ広くした幅90cm・高さ120cm・奥行35cm程の縁取りがみられる。

羨門部の前は広くなり、下部の幅約130cmで前方に向かって開く前庭部とも言うべき広場が



第6図 4号横穴実測図(1/60)

ある。この空間には地山の凝灰岩を彫り込んで作られており、ここからさらに地山を少し彫り窪めた墓道らしきものが続いている。

出土遺物には横穴の前部および墓道の堆積土から検出された近世の陶磁器片多数がある。これらの中には前部および墓道の床面上から出土したものが多く、本横穴が近世期には開口していたことが知れる。

#### 遺物

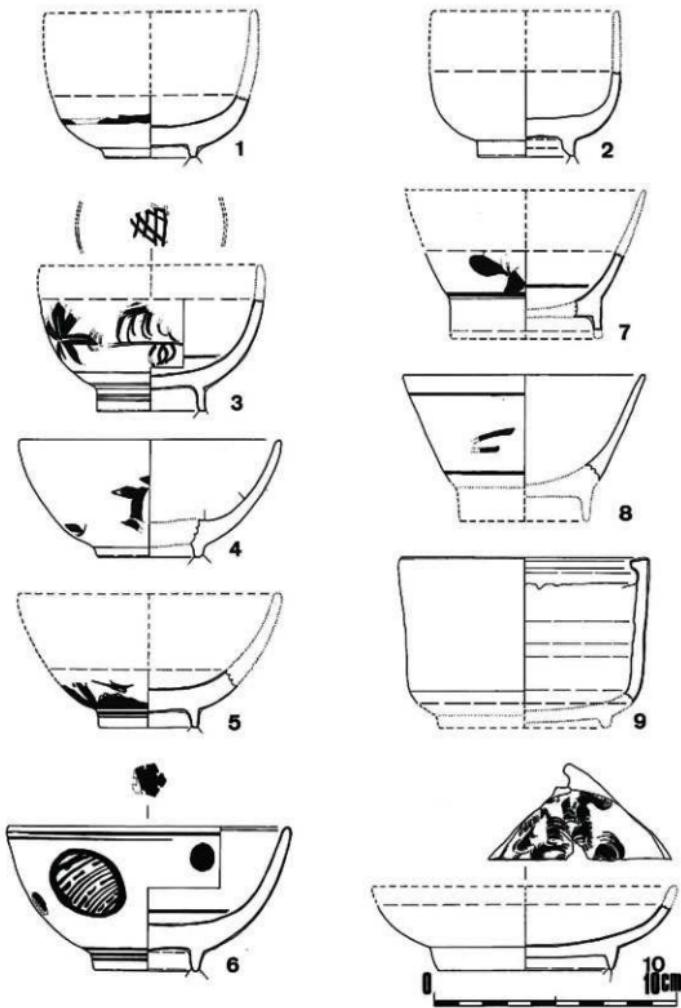
1・2は高台部から口縁部が真っ直ぐに立ち上がる染付小丸碗で、1は底部のみ1/2、2は1/3の破片である。1は高台径3.8cm・現存高2.6cm、2は高台径4cm・現存高3.6cmを測る。ともに高台疊付部分のみ露胎にする。1は器外面に染付文様の一部が残るもの図柄については不明であり、2は現存部でみると白磁碗であるが本来は口縁部に染付文様を施していたものと考えられる。

3・4・5・6は1・2の小丸碗に対して口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がり、口径も広い染付丸碗である。3・4は1/4、5は1/2、6は底部のみ2/3より復原した。3は高台径4.6cm・現存高4.6cm、4は復原高台径4.5cm・復原器高4.8cm、5は高台径4.3cm・現存高2.3cm、6は高台径4.3cm・器高5.9cmを測る。やはり高台疊付部分を露胎とし、4は見込み蛇ノ目輪ハギを施す。3・4・5は器外面に植物文様、6は円文を描く。また、3は見込み中央に格子目状の文様、6はコンニャク判の五弁花を施す。

7・8は幅広く高い高台から口縁部が真っ直ぐに立ち上がる染付の広東碗で、7は底部のみ1/8、8は口縁部1/6の破片である。ともに小片であるが、7は復原高台径6.4cm、8は復原口径10.2cmを測る。それぞれ器外面に染付を施すが、小片のため図柄は不明である。

9は筒形を呈する青白磁の香炉である。1/4の破片より復原。復原口径10.4cm・同器高7cmを測る。口唇部の内部の少し突出させて逆L字型の口縁とし、その下から見込み底部にかけては露胎としている。器外面の青白磁釉はやや粗く、水玉状に胎土が露出した部分が見られる。

10は染付皿底部1/6の破片である。高台径7.2cm・現存部高2.7cmを測る。復原すれば、口径12.8cm・器高3.5cmの皿と考えられる。見込み部分に幅広の施文具による波状の文様を施す。



第7図 4号横穴出土遺物実測図 (1/4)

## 5. 調査のまとめ

今回の調査は茂木根横穴群の確認調査であったが、調査によって確認できた点についてまとめるとともに今後の課題について述べておきたい。

まず、茂木根横穴群の構成については、故坂本經堯先生をはじめ多くの先学が述べてこられた（注1）ように2基を1群とし、これが1群づつ2つの尾根に別れて分布する、計4基からなる横穴群であった。調査の合間にみては本横穴群の立地する尾根とその周辺を探索したが、從来知られていた支群内で新たな横穴を発見することも、また他の尾根にこれら以外の支群を見つけることもできなかった。したがって、現状では茂木根横穴群はこれまで知られていたように東西2群、各2基づつ計4基からなる横穴群と考えられる。

次に、横穴の構造については今回調査した3基はいずれも単室構造をもつ横穴であった。これらの横穴は玄室規模の違いはあるものの、玄室平面観が略方形を呈し、天井部を要入りの蒲鉾状ドーム形につくる点で共通している。また、床面が露出して後世の改変が加わったと考えられる1号以外の2基では床面に「コ」の字型の屍床を作ることでも共通していた。從来茂木根横穴群については坂本經堯先生による「きんちゃん形で屍床はない」と言う認識が一般的であった（注2）が、今回の調査結果はそれを訂正することとなった。なお、茂木根横穴群玄室に見られるこれらの特徴は熊本県下に広く分布する所謂「肥後型」屍床配置をもつ横穴の構造に共通するものであり、本横穴群が肥後地域から導入された造墓技術によって作られたことをも示している。

個々の横穴については東支群の1・2号横穴が比較的小型であったのに対して、西支群の4号横穴は大型で、かつ保存状況も良好であった。この両支群間の横穴規模および保存状況の差異は、両支群横穴の時間的な推移による構造変化の可能性を除けば、立地する尾根の自然的な条件の差異に基づくものと考えられる。すなはち、2号横穴の調査中に床面から大量の湧水をみたことからも判るように、東支群2基が掘削された地山の凝灰岩は通水層を有し質的に脆い部分があった。東支群の2基は横穴の構築に際して当然のことながらこの部分を避けるか、そうでなければ湧水についての対策を講じる必要があるが、おそらくこれが2号横穴の敷石や2号横穴よりやや高い1号横穴の床面に繋がったものと考えられる。しかし、この通水層への対策の結果東支群2基の掘削位置は自ずと高くならざるを得ず、この高くなつた掘削位置と尾根頂部との関係が東支群2基の規模を小型にしたものであろう。なお、同様に通水層を有するほどの地山の脆弱さは東支群開口部の崩落をも導いていると考えられる。

ところで、東支群1号横穴は先述したように床面が露出し、後世の改変が加えられたものと考えられていたが、この状態は坂本經堯先生がかつて茂木根横穴を実査された際に「防空壕に改造されたものである」（注2）とされた横穴に相当すると思われる。さらに、東支群2号横

穴に見られる床面の敷石は熊本県下では本横穴群の他にはあまり類例がなく、管見の及ぶ範囲では山鹿市城横穴群中例や天草郡大矢野町鳩之釜所在犬飼横穴群3号が知られる位である。東支群2号横穴の場合、敷石は床面からの湧水に対処しての施設と考えられたが、その平面觀は所謂「肥後型」屍床配置をもつこともあり、その系譜がどこから導かれるものか、今後他地域での調査例を含めた検討が必要である（注3）。

茂木根横穴群の出土遺物については、2号横穴奥門前から出土した須恵器高台付塊片と4号横穴前庭部および墓道から出土した染付小丸碗・丸碗・広東碗・皿、青白磁香炉などの近世陶磁器類がある。この中で、4号横穴出土磁器の見込みにコンニャク判の五弁花を押した丸碗は18世紀前半代、また広東碗は18世紀後半代を中心とした器種であり、その他の製品もほぼこの時期の所産と考えられる（注4）。これらの磁器類の一部が4号横穴前庭部および墓道の床面から出土したことは、4号横穴の開口時期が江戸期にさかのばるとともに当時何らかの祭祀行為が行われていたことを示している。2号横穴出土の須恵器高台付塊は北部九州地方を中心とした小田富士雄氏編年、およびこれを基にした肥後地方を中心とする松本健郎氏編年のVI期に位置付けられ、実年代では7世紀後半の所産と考えられる（注5）。

最後に茂木根横穴群の構築順序とその年代については今回の調査では得られた資料、特に土器類が少なく明確にはできなかった。しかし、かろうじて横穴機能時の遺物と考えられる2号横穴出土須恵器高台付塊が7世紀後半代に位置付けられたことは、本横穴群の築造年代を考える上での一応の目安となる。また、東支群1・2号横穴において1号横穴の床面が2号横穴の床面より高く作られていることを2号横穴での湧水を1号横穴で避けようと試みた結果だと見れば、東支群の横穴2基は尾根の奥から先端部に向けて2号・1号の順に構築されたと考えられる。いずれにせよ、これだけの資料では何とも判断しがたく、ここでは茂木根横穴群が7世紀後半頃に機能していたであろうことを指摘するにとどめておきたい。

#### （注）

1. 坂本経堯・坂本経昌『天草の古代』1971年（熊本）など。
2. 同 上 P 106
3. 三島格他「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』50 1975（熊本）、山鹿市城横穴群例については松本健郎氏の御教示を得た。なお、敷石をもつ横穴は熊本以外では大分市飛山横穴群・行橋市竹並横穴群などがある。
4. 大橋康二「肥前磁器の変遷と分布」『国内出土の肥前陶磁』1984年（佐賀）
5. 小田富士雄「総括」『天觀寺山窯跡群』1977年（福岡）・松本健郎「須恵器生産をめぐる諸問題」『熊本県文化財調査報告』48 1980年（熊本）

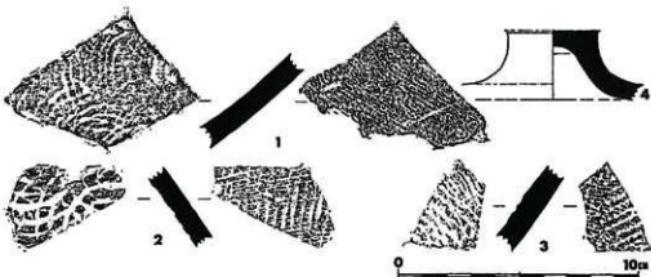
## 6. 考察

### (A) 茂木根横穴群周辺の古墳について

茂木根横穴群が位置する本渡市茂木根地区周辺には本報告の地理的・歴史的環境で略述したようにいくつかの古墳および横穴が分布する。しかし、これらは発掘調査によって確認されたものではなく、長く本渡中学校で教鞭を取られていた鶴田倉造氏や天草の歴史の解明を試みられた故坂本経堯氏によって実地確認・聞き取り調査され、今日まで記録に残されてきたものである。未だ考古学が一般社会に定着していたとは言い難い時期にもかかわらず、これらの記録を残された両先学の御尽力に対し改めて深い敬意を表するものである。しかしながら、近年の本渡市街地周辺の宅地造成・道路整備・圃場整備等による地形の変化は激しく、両氏が記録に残された古墳および横穴の位置は現在かなり確認できなくなっている。さらに、かつて天草管内の考古資料を一手に保管されていた旧本渡市立図書館周辺が昭和38年火災に遭い、その後保管施設の変更その他も重なって、資料の所在やその出自記録との関係が不明確になったものもある。そこで、ここではこの両先学の記録を基に現在の状況を交えながら、茂木根地区周辺の古墳および横穴の基数と所在地について再確認してみたい。

茂木根地区に止まらず天草の古墳・横穴についての研究で基本となるのはもちろん昭和46年に出版された坂本経堯・経昌氏による『天草の古代』であるが、同書には茂木根およびその周辺地区に分布する古墳・横穴として茂木根横穴4基と大矢崎古墳群3基をあげ、このほかに丸尾ヶ丘出土の丁字頭勾玉と善坪と称する塚について紹介されている。また、この後に編集された昭和52年発行の文化庁による『全国遺跡地図(熊本県)』では茂木根横穴群として茂木根の脇である明瀬に1基・江古平に4基・善坪に3基、計8基の横穴の存在を指摘し、この他に大矢崎古墳群4基と明瀬平鬼塚古墳1基をあげている。この両書の内容は茂木根(江古平)横穴群4基については共通するものの、大矢崎古墳群の基数と善坪の横穴の基数に違いがある。また、明瀬の横穴1基と明瀬平鬼塚古墳1基については前書に記載がなく、丸尾ヶ丘の丁字頭勾玉については後書に記載がない。

そこで、これらの記録の真偽について確認すべく現地を尋ねると、まず現存する古墳および横穴には茂木根横穴群4基と明瀬平鬼塚古墳1基があるのみである。茂木根横穴群については本書に報告したので繰り返し述べないが、明瀬平鬼塚古墳は明瀬集落に迫る尾根の先端部あたりの明瀬平43・44番地に位置する。すでに墳丘と石室石材の大半を失い僅かな石材を残すのみで、古墳としての旧状を止めないが、古墳の位置する尾根全体が水田や畠地として利用されているのに対して、古墳の周辺部だけは未耕作のまま残っている。地主は明瀬在住の坂口次敏氏である。なお、本墳の周辺からはこれまでに数片の須恵器片が採集されている。1・2・3は甕あるいは壺の胴部片で、ともに器内面に青海波状文が残る。4は壺もしくは壺の脚台と思わ

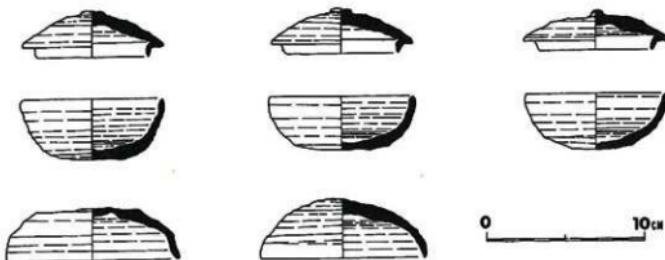


第8図 明瀬平鬼塚古墳周辺採集遺物実測図(1/2)

れ、端部が欠損している。編年的な位置付けについては細片のため明らかでないが、形態的には6世紀代以降の所産と考えられる。なお、これらの遺物からして明瀬平鬼塚古墳は横穴式石室である可能性が強い。

さて、茂木根横穴群および明瀬平鬼塚古墳に対して他の古墳および横穴は全く現存していないため、これらについては記録をもとに現地での聞き取り調査を行なった。なお、この際には鶴田倉造先生に御同伴をお願いして、これらが古墳および横穴として知られるに至った経緯を伺いつつ、その位置を確認するよう努めた。この結果、大矢崎古墳群と善坪の横穴および丸尾ヶ丘出土の丁字頭勾玉についての手掛けりを得るとともに、字五反田の耕作地内に古墳らしきものがあったことも知られた。

鶴田先生のお話によると、まず『天草の古代』で3基、『全国遺跡地図』で4基と基數に違ひのあった大矢崎古墳群は昭和33年7月工事中に発見され、翌年3月五和町沖の原貝塚調査準備もあって天草を訪ねられた坂本経堯氏によって古墳と推定されたとのことである。当時のことを記した地元の『みくに新聞』記事によれば坂本経堯氏采訪の際、古墳の1基は既に破壊されていたもののこれと同じ丘陵上に巨石墳1基と古墳らしき墳丘1基が確認されたという（注1）。また、同様に『熊本日日新聞』記事によれば、古墳についての詳細な記載はないものの周辺に4基の横穴式石室墳と推定されるものが発見されたとなっている（注2）。新聞記事のため絶対的な信憑性にかけるが、『みくに新聞』では3基、『熊本日日新聞』では4基と記載されており、先の両文献による古墳基數の違いと同じであることは注目される。あるいはこの基數の違いは当時の関係者の間にあった認識の差であったとも考えられ、これが先の文献に繋がったものかも知れない。なお、古墳のあった位置はかつて操業していた大曲製材所敷地裏手の字広瀬9-5番地あたりであるが現在は宅地化しており、古墳の痕跡すらも見出せない。したがって、ここでは古墳の基數を確定するというよりもこれらの記録からかって実在していたで

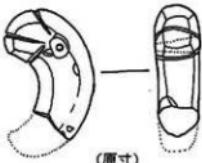


第9図 善坪横穴出土遺物実測図(1)

あろう古墳の基数を推定するに止めざるをえないが、発見当初から現地を訪ねられている鶴田先生は当時横穴式石室墳と断定できるものはなかったとしつつも、『みくに新聞』記事にある破壊された1基およびこれと同じ丘陵上に位置した古墳1基の最低2基は存在していた可能性があると考えられる。ここではこれに従っておきたい。

次に善坪の横穴については『天草の古代』では「善坪と称する塚」、『全国遺跡地図』では「横穴3基」となっていた。これについて、『天草の古代』では伝聞によるもので実査していないとされ、詳細については何も記載されていない。また、『全国遺跡地図』には出典の記載がなく、これらの記載が何によるものか不明である。そこで、これについても鶴田先生に御話を伺った折、善坪の横穴とは茂木根1125番地在住池田スエミ氏宅の敷地内にあった横穴1基であり、すでに破壊されたとのことであった。戦時中池田氏宅の敷地内にあった横穴を防空壕として利用した際に須恵器壺類と紡錘車が出土し、この内の須恵器壺類を昭和40年に本渡市立天草キリストン館の開館に際して寄贈されたことで広く知られる所となったという。なお、防空壕に改造された横穴はその後掘削され、現存していない。このため横穴の構造その他については明らかでなく、出土遺物の紡錘車も現在は存在を確認できなくなっている。他の須恵器壺類については幸いに現在も天草キリストン館で保管されており、壺身3個・壺蓋5個を数える。このうち壺身・壺蓋3個づつは組みをなすと考えられる。なお、筆者はこの須恵器壺類をかつて茂木根横穴群からの出土遺物と考えていたが、ここで訂正しておきたい(注3)。組みをなす壺身・壺蓋は蓋に受部のかえりがつく形態のもので、かえりはやや長く下に伸びる。蓋の天井部に簡単な突起を付けてつまみの代わりとなし、壺身ともどもやや小型につくる。他の壺蓋2個は口縁部が外反気味に伸びるもので、天井部のケズリは粗く、範囲が狭い。小田富士雄氏ならびに松本健郎氏の須恵器編年ではIVB期～V期に位置付けられ(注4)、6世紀末～7世紀前半代の所産と考えられる。善坪横穴の築造年代もこの時期と考えられよう。

また、丸尾ヶ丘の勾玉については、『天草の古代』に掲載された写真にある製品を天草キリストン館で実見することができた。この勾玉は『天草の古代』に詳述されているように、昭和38年丸尾ヶ丘一帯に県立果樹普及研究所をつくるにあたってブルトーザーで開墾を行った際出土したものである。重機による削平のため、出土遺構や伴出遺物などは全く判らない。現在丸尾ヶ丘の近くに御住まいでは、かつてこの研究所に勤めていた赤城隆顕氏に出土当時の御話を伺ったが、勾玉以外には何も出土しなかったとのことであった。なお、この勾玉について昭和38年8月11日に坂本経堯氏が採取され、果樹普及研究所所長室に保管を依頼されたとの記録が『天草の古代』に記されている。天草キリストン館には、この際氏の残された走り書きのある名刺も保管されていた。この勾玉については当初坂本氏の依頼どおりに本研究所で保管されていたが、天草キリストン館の開館後展示資料とするために移管されたものである。勾玉は末端部を欠くが、頭部に3本の沈線を施した丁字頭勾玉である。原石はヒスイで緑色を呈し、孔は片面からのみ穿孔されている。丁字頭勾玉は一般に古墳時代前半期の古墳から出土する遺物であり、あるいは周辺に古墳が存在していたのかもしれない。



第10図 丸尾ヶ丘出土勾玉実測図

ところで、現地での聞き取りの際茂木根字五反田にこれまでの記録には残されずに破壊された古墳があったという話を聞いた。話を下さったのは茂木根1112番地に御住まいの松原義夫氏で、昭和40年墳字五反田846-5番地の耕地を圃場整備のために重機で掘り下げた際、大きな板石が掘り出されたという。この時には広瀬951-1番地に御住まいの金子正敏氏も立ち会われたとのことで、金子氏によれば板石材の下には数枚の石材で構築された石棺状のものがあったという。重機による偶発的な発見のため詳しい構造や伴出遺物などについては不明であるが、箱式石棺状のものであった可能性が強い。なお、これらの石材は現存しておらず、周辺も圃場整備により旧状を止めている。したがって、墳丘を持つ古墳であったかどうかについては明らかでない。

最後に文献記録の双方に記載されていた明瀬の横穴1基については聞き取り調査でも何ら手掛かりを得ることができなかった。しかし、聞き取り調査に漏れがあることも考えられ、これについては今後の課題としておきたい。

以上、文献記録および現地での聞き取り調査に基づいて茂木根周辺の古墳および横穴について述べてきた。これをまとめると茂木根周辺には横穴式石室墳と考えられる先明瀬鬼塚古墳1基と茂木根字江古平の横穴4基が現存していた。これに対して、すでに現存しないものの文献記録および遺物その他によって実在していたと考えられる古墳および横穴には茂木根字善坪

の横穴1基と大矢崎古墳群の2基があった。さらに、宇野稻には墳丘を持つかどうか判らないが箱式石棺と思われる1基があり、丸尾ヶ丘からは一般に古墳の副葬品として出土する丁字頭勾玉が検出されている。

これらの中で遺物その他により一応の年代推定が可能なものは現存する茂木根横穴群4基と明瀬平鬼塚古墳1基、既に現存しない善坪横穴1基であり、それぞれ出土した須恵器により茂木根横穴群は7世紀後半、明瀬平鬼塚古墳は6世紀代以降、善坪横穴は6世紀末～7世紀前半代あたりに位置付けられた。この他の大矢崎古墳群・五反田の箱式石棺・丸尾ヶ丘の丁字頭勾玉については手掛かりとなるべき資料が少なく、構築年代の推定は難しい。

従来、本渡市域の古墳の様相については6世紀代に出現し、それまでは地下式板石積み石室墓や箱式石棺などの墳墓が構築されていたものと考えられている（注5）。これは取りも直さず古墳時代前半期の本渡市域には古墳を構築しない集団が居住しており、6世紀代に入って古墳を構築する社会へ組み込まれていったものと理解される。このことからすれば、大矢崎古墳群は本渡市域における古墳出現時期以降に、五反田の箱式石棺はそれ以前に位置付けられる可能性が大きい。また、丸尾ヶ丘の丁字頭勾玉についてはこれを伴っていた遺構が明らかでないが、丁字頭勾玉は一般に古墳時代前半期の古墳から多く出土し、天草では大矢野町惟和島桐の木尾ばね古墳から2個出土している。桐の木尾ばね古墳は竪穴式石室を主体部とする円墳で、5世紀前半代の所産と考えられる天草でも初期の古墳であり（注6）、丁字頭勾玉の出現時期を示している。あるいは丸尾ヶ丘の丁字頭勾玉もこの前後の時期と考えてよいのかも知れない。なお、丸尾ヶ丘の丁字頭勾玉を伴っていた遺構が桐の木尾ばね古墳と同様に古墳であったとすれば、これまでの本渡市域における古墳に対する理解を改める必要性もでてくるが、出土遺構が全く判らないため、ここでは地下式板石積み石室墓などの古墳出現以前の墳墓であった可能性を指摘しておきたい。

#### （注）

1. 『みくに新聞』昭和34年3月13日付記事。
2. 『熊本日日新聞』昭和34年3月27日付記事。なお、これらの新聞記事については鶴田倉造先生のスクラップより御教示を得た。
3. 「天草の古墳」『(天草郡) 河浦町郷土史』第5編（1981）において、善坪出土須恵器を茂木根横穴出土として扱っている。
4. 本書〔1〕-5（注5）の参考文献に同じ。
5. 「本渡市の古墳(I)」『本渡市文化財調査報告』第4集 および注3文献。
6. 坂本経庵・経昌『天草の古代』1971年。

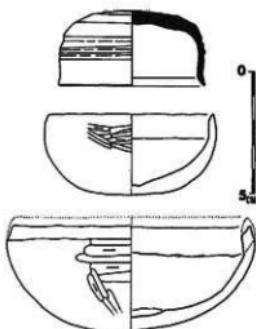
## (B) 天草諸島に分布する横穴について

これまでに進められてきた研究によると天草諸島には茂木根周辺部のほかに大矢野町大手原所在諏訪原横穴群、同町塙之釜所在大飼横穴群、同町田畠所在田畠横穴群、松島町内之河内所在馬場横穴群が分布している。また、同じ天草諸島ながら行政体を異なる鹿児島県長島町日当には浜瀬横穴がある。

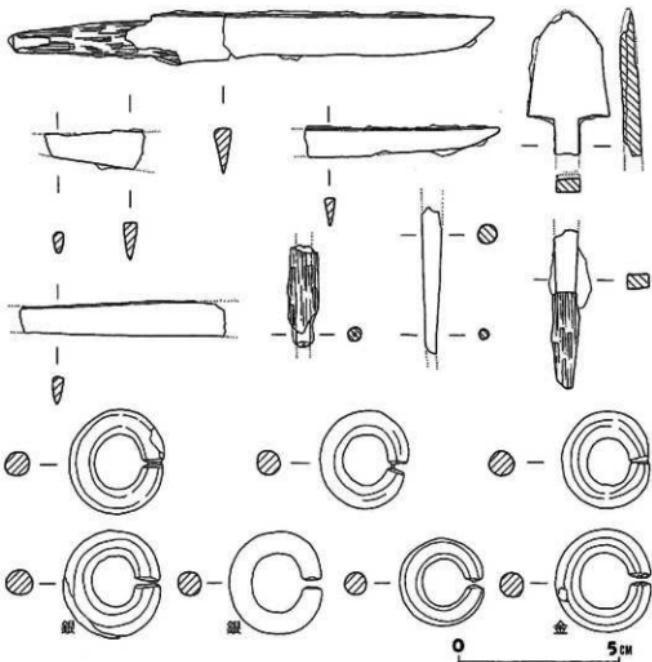
このうち、諏訪原横穴は1基からなり、現存するというが確認できない。大飼横穴群は4基からなる横穴群でそのうちの3号横穴は茂木根2号横穴と同じく敷石敷であったというが、すべて破壊された。

なお、遺物として1号横穴から7世紀代の所産と考えられる須恵器台付長頸壺が出土していたが、現在所在がつかめない（注1）。馬場横穴群は内ノ河内1471番地に御住まいの岡部末子氏宅裏の斜面に分布する横穴群であるが、物置等として長く利用されており、かなり変容しているものと考えられる。また、正式な調査もされておらず、基數・構造・出土遺物など詳しいことはほとんど判らない。現状を見る限りでは複数の横穴からなるものと思われる。

これらに対して、田畠横穴は6基からなる横穴群で、昭和40年大矢野町によって発掘された。正式報告書が刊行されていないため詳細についてはわからないが、現在一部は消滅している。出土遺物には耳環・鉄鎌・刀子・亀骨・須恵器などがあり、これらは同町自然休暇村管理センターに保管されている（注2）。耳環は銅製で7個あり、表面金張りのものが1個・銀張りのものが3個ある。鉄鎌と刀子はかなり破損が激しく、鉄鎌2本+α・刀子3本+αがあった。亀骨は見当たらず、須恵器には小型壺の蓋と思われるものがある。なお、このほか同センターには田畠横穴出土とされる土師器壺があった。大小2個があり、大きい方の口縁部は欠けている。須恵器壺蓋および土師器壺ともに私見では6世紀末～7世紀に位置づけられると考えられる。ただ、同センターの遺物保管状態は出土資料を一箇所に集めて置いてあるといった状態のため、個々の遺物と出土横穴との関係が明らかでない。また、町内に分布する他の遺跡から出土した資料も一括して展示されていることからすれば、場合によってはかなり他の遺跡から出土したものが混入している可能性も多い。そこでこれらの遺物の各横穴における出土関係について同町教育委員会に確認したが、発掘当時の資料・記録は入手できず詳細不詳のままであった。したがって、これらの遺物については一応実測図を上げておくものの、すべて田畠横穴出土遺物であるかどうか断言できない。

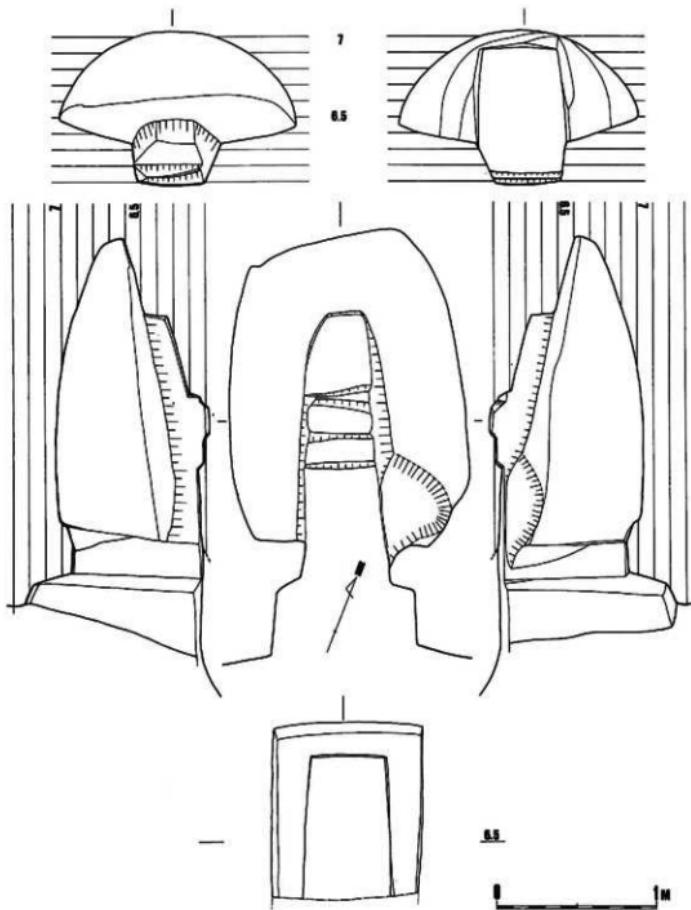


第11図 田畠横穴出土土器実測図(1/2)



第12図 田畠横穴出土遺物実測図（装飾品・鉄製品）(2/3)

鹿児島県長島町浜瀬横穴については、昭和47年に行われた故池水寛治氏を中心とした出水高校考古学部による同町蔵之元所在明神古墳群の調査の際に確認されたという。未だ正式な調査が行われていないが、発見の経緯を話して頂いた鹿児島県教育委員会牛ノ浜修氏によると、明神古墳群の調査中に古墳らしきものがあるという地元の方の案内で現地を訪ね、確認されたとのことである（注2）。1基のみで存在し、出土遺物などは知られていない。横穴は平面觀隅丸の略長方形を呈し、床面にはやや省略されてはいるものの「コ」の字形屍床が見られる。玄室奥行き西壁側170cm・東壁側190cm、幅奥壁側100cm、羨道側110cm、高さ羨道側中央部で90cm・屍床上で70cm、奥壁側で20cmを測る。天井部は低く、蒲鉾状のアーチ形をなす。屍床は



第13図 鹿児島県長島町浜脇横穴実測図(1/30)

区画を設けず平らであり、奥壁側から菱門側に向かって緩やかに傾斜する。屍床および床面中央部に陥沈がみられるが、床面の傾斜その他からすれば後世の改変と考えられる。所在地は長島町字平尾2-505番地である。

これら茂木模周辺部以外の5箇所の横穴群は、以上述べてきたように犬飼横穴群を除いてほぼ現存している。しかし、現存するとはいっても諏訪原横穴は確認できず、田畠横穴群も一部が破壊され、さらに馬場横穴は後世の改変によってかなり状況が変化していた。したがって、ほとんど現状を止めていないというのが実情である。また、これらの横穴については未だ正式な調査も行われておらず、唯一調査された田畠横穴群についても報告書が未刊の状態にあり、横穴の正確な把握はかなり困難な状況にある。

ただ、少ない資料の中で見る限りこれら5箇所の横穴は、構造的にやはり肥後地方の横穴の影響下に構築されたものと考えられる。また、横穴の構築年代についても今回実測図を掲載した田畠横穴群出土遺物の須恵器埴蓋や土師器坏類からみれば6世紀後半から7世紀代に位置付けられると考えられる。この年代はかって犬飼1号横穴から出土した須恵器高台付長頸壺が7世紀代の所産と考えられていることでも首肯される（注4）。むしろ天草諸島に分布する横穴は時間的に見て、肥後地方の横穴の中では後出する部類に入ると見られる。これは先述した本渡市域に分布する横穴を加えても、共通する特徴である。

天草諸島は総数4000～5000基以上の横穴が存在するといわれる熊本県下において、きわめて横穴の少ない地域である。これは天草地域に横穴を掘削しやすい凝灰岩の露頭面が少ないと起因している（注5）が、これに加えて横穴および出土遺物の調査が遅れ、横穴の内容等について不明な点が多いことも影響している。したがって、現段階では横穴の構造や横穴群の構成、副葬品などについての総合的な検討は不可能であり、これらについては今後の資料の蓄積に待ちたい。

（注）

1. 阿部堅二・今井義量・山崎純男・西健一郎・松本健郎・三島格「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』50 1975（熊本）に掲載の大矢野町遺跡地名表による。
2. 大矢野町教育委員会の御厚意で、田畠横穴出土遺物の実測および本報告書への掲載を御許可していただいた。
3. 鹿児島県教育委員会牛ノ浜修氏および長島町教育委員会山崎友喜・西田太郎氏の御厚意で浜瀬横穴を実測させていただいた。記して謝意を表します。
4. 松本健郎「中九州の横穴」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻 1982（福岡）P. 1231に記載。
5. 注4文献 P. 1239・1240にまとめられている。

## 【2】 先尾串箱式石棺群現状確認調査報告書

### 1. はじめに

本調査は本渡市教育委員会が市内文化財確認調査の一環として昭和59年度に実施した、本渡市下浦町に所在する先尾串箱式石棺群の現状確認調査報告書である。調査は同年8月22日から25日までの間に実施した。調査の成果については終了後、速やかに報告する予定であったが、予算その他の事情により今日まで果たせず、本報告書に掲載することとなったものである。

調査にあたっては本渡市教育委員会が主体となり、熊本大学文化財研究会と国学院大学学生の協力を得て実施した。また、郷土史家鶴田倉造、天草高等学校教諭橋本康夫・坂本友博、琉球大学助手池田栄史の各氏には現地での指導をいただいた。さらに、地主黒川マツ子氏には調査の快諾をいただいた。記して、謝意を表します。

### 調査組織

調査主体	本渡市教育委員会教育長	浦上 恒雄（当時）
	本渡市教育委員会社会教育課長	黒川幸二郎（当時）
調査員	本渡市教育委員会文化係長	長嶋 孝吉
	本渡市立歴史民俗資料館学芸員	平田 豊弘（当時）
調査補助員	熊本大学文化財研究会	
	田村三千夫・荒川 博文・有馬 仁司・田上 清美・佐々木雅宣・小山 智宣	
	銀形 明子・有富 英明・吉内 素子・大村 泰子・内藤 純子・井上 信之	
	国学院大学学生	竹田 宏司
調査指導	郷土史家	鶴田 倉造
	天草高等学校教諭	橋本 康夫
		坂本 友博
	琉球大学助手	池田 栄史
調査協力	地主・管理者	黒川マツ子

## 2. 遺跡の位置（遺跡分布図についてはP. 3 第1図参照）

先尾串石棺群は本渡市下浦町字先尾串2-2番地に所在する。石棺群の位置する下浦町は本渡瀬戸を望む天草上島の西南端部一帯をいい、本渡市との合併以前は一つの行政体をなしていた。下浦地区は八代海に面し、本渡瀬戸を挟んで本渡市楠浦地区と向き合い、小湾を形成している。この小湾を取り巻く下浦・楠浦および新和町の沿岸部には、下浦地区的須森古墳・金左衛門鬼塚古墳・湯賀新田古墳・楠浦地区の楠浦新田古墳・立浦鬼の鼻古墳・南古里観音向山古墳・新和町の櫻の浦石棺群・天附古墳群などが分布し、一古墳文化圏を形成している（注）。これらの古墳はみな例外なく、標高10~20m程の海を望む小丘上に位置しており、有明海と八代海を結ぶ本渡瀬戸を媒体として成立した古墳文化圏であることを示している。

先尾串石棺群もこれらの古墳と同様に海に向かって突き出た小岬の突端にあり、石棺群が分布するあたりの標高は14m余りを測る。石棺群の位置する小岬のすぐ下は波が洗い、隣接する小岬との合間には小谷水田が開かれている。現在、小岬の東側にあたる小谷水田は干拓のための堤防がつくられ広い水田となっており、石棺群の位置する小岬の突端部までの行き来も容易になっている。

石棺群の位置する小岬の突端部からは、右手に須森の岬、左手に戸の崎、正面に竹島と上血塚・下血塚の両島、海を隔ててその背後に聳える天草下島の山々が望まれる。

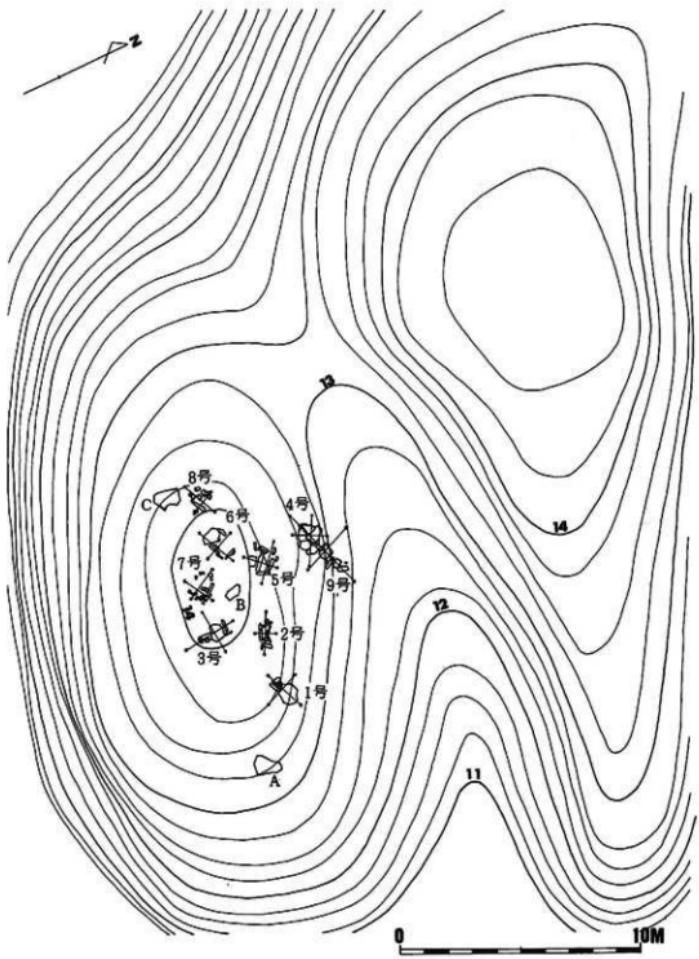
### （注）

これらの古墳については本書P.2の茂木根横穴群の地理的・歴史的環境にて概述したが、詳細については下記の文献を参照されたい。

- ・坂本經堯・經昌『天草の古代』1971（熊本）
- ・本渡市教育委員会「本渡市の古墳(1)」『本渡市文化財調査報告』第4集 1984（熊本）
- ・河浦町教育委員会『河浦町郷土史』第5編 1986（熊本）

なお、新和町壓の浦箱式石棺群および天附古墳群については、昭和48年8月新和町教育委員会の主催により同町文化財保護委員の皆さんと本渡市立歴史資料館学芸員平田豊弘、国学院大学助手池田栄史、熊本大学文化財研究会会員などが参加し、同町内の遺跡分布調査を行った際に確認されたものである。櫻の浦箱式石棺群は4基、天附古墳群は最低3基からなる。天附古墳群については詳細な表面観察を行っていないため、あるいはさらに基数が増える可能性もある。

なお、今回櫻の浦箱式石棺群については新和町教育委員会の御厚意により、本書に実測図を掲載させていただいた。記して謝意を表します。



第14図 先尾串石棺群地形測量図 (1/200)

### 3. 調査の概要

先尾串石棺群の調査にあたっては、本調査が現状確認調査であることを念頭に置き、石棺群の現状を改変しないよう努めた。したがって、調査では発掘機材を一切用いず、周辺の地形測量と石棺の現状実測のみ行った。

以下、調査日記に基づき、調査の概要を述べる。

昭和59年8月18日（土） 晴れ

調査に先立ち、石棺群の位置する小岬まで水準点の移動を行う。

8月19日（日）～21日（火）

調査用具の借用・購入および点検・整備を行う。

8月22日（水） 雨のち曇り

午後1時に調査関係者が本渡市立歴史民俗資料館に集合する。調査についての打ち合わせを行い、終了後男子は現地の表面清掃、女子は宿舎の整備および夕食の準備にかかる。

8月23日（木） 晴れ

午前中、昨日に引き続いて表面の清掃を行い、石棺8基、石棺状の集石1基、蓋石材3個を確認する。午後より、確認した石棺の実測と周辺地形の測量を行う。

8月24日（金） 晴れ

石棺実測および地形図の作成を継続する。本渡市文化財保護委員山崎辰生・前田勲・元社会教育指導員仁田長政氏見学に見えられる。

8月25日（土） 曇りのち雨

昨日に続き、石棺実測および周辺地形図の作成を続ける。本渡市文化財保護委員の岡部禪龍・岡部繁夫・金沢武昌氏並びに郷土史家武内新吉・平田正範氏見学に見える。午後より雨となるが、作業をつづけ、石棺の実測および周辺地形図の作成を終了する。

8月26日（日） 雨

雨のため、本渡市立歴史民俗資料館で図面・用具の整理を行う。本来、現地で保護のための土盛りを行う予定であったが、中止する。熊本大学文化財研究会員は帰郷する。

8月27日（月） 晴れ

写真撮影および現地の後片づけを行う。

8月28日（火） 晴れ

地主の黒川氏を交えて、本石棺群についての今後の対応を協議する。応急的な保護対策として土盛りを行い、調査を終了する。

#### 4. 調査

先尾串石棺群が位置する小岬は雑木に覆われており、小岬突端部はラクダの背中のように2つの小丘が並んだ形になっている。このうち、石棺群が分布しているのは先端にあたる海側の小丘であり、ほぼ東西に細長い楕円状を呈する。小丘の最高部は標高14.27mを測り、ここを中心にして東西約15m、南北約10mほどのなだらかな平坦面をなす。現状を見る限り、この周辺部が耕地化された形跡はなく、この先端部の小丘は石棺群構築以前に形成されていたものと考えられる。なお、石棺群はこの平坦面に構築されているが、この小丘を海から望むと円墳状に見える。小丘周辺部の表土は地山が砂岩質の地質のため、長年の浸食により風化し、流失しつつある。このためか、石棺群はいずれも蓋石のみならず、棺身材まで露出しているものが多い。

石棺のほとんどは主軸を東北方向に向けており、小丘の斜面に位置する石棺は斜面と平行に構築されている。今回の確認調査では箱式石棺8基、蓋石材3基、および箱式石棺状の集石1基を確認したが、ここでは便宜上箱式石棺に東側から1号より8号までの仮番号をつけた。また、蓋石材も同様にA・B・Cと仮称し、箱式石棺状の集石は一応9号石棺として扱った。以下、各仮番号毎に現状を述べる。

##### (1) 1号石棺（第15図）

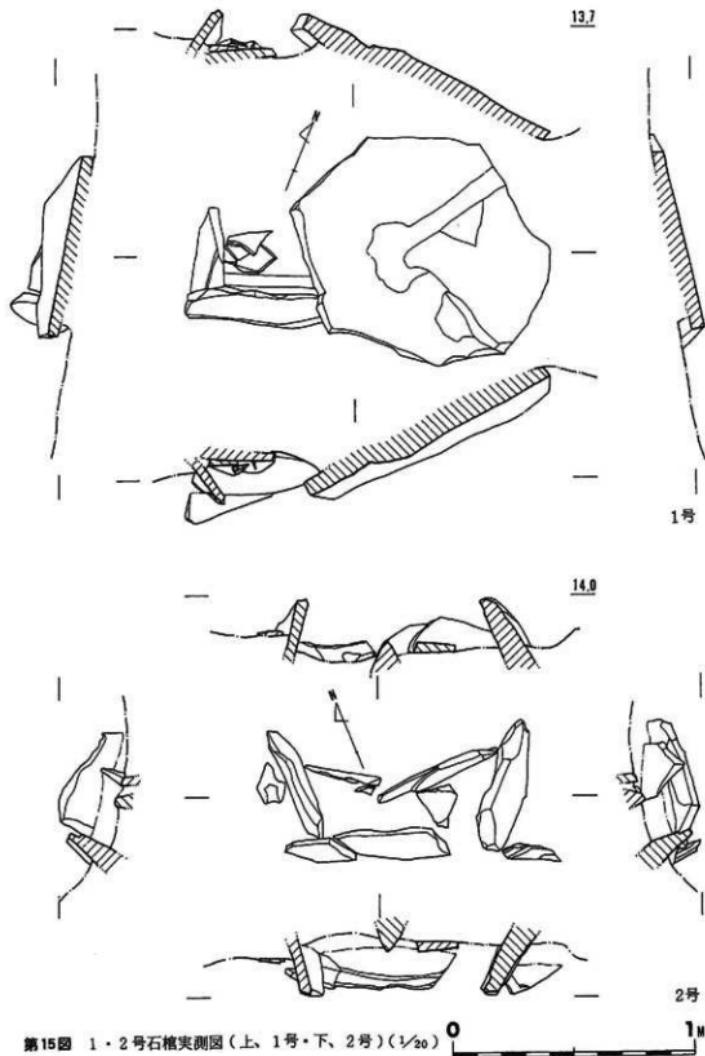
蓋石が東側の斜面へ滑り落ちるような状態で残っており、その下に棺身材の一部が露出している。石棺の主軸はN-68°Eで、東小口と南側石材が内部に倒れ込んで残る。棺内法70cm×30cmを測る。なお、1号棺に隣接して蓋石材Aがある。

##### (2) 2号石棺（第15図）

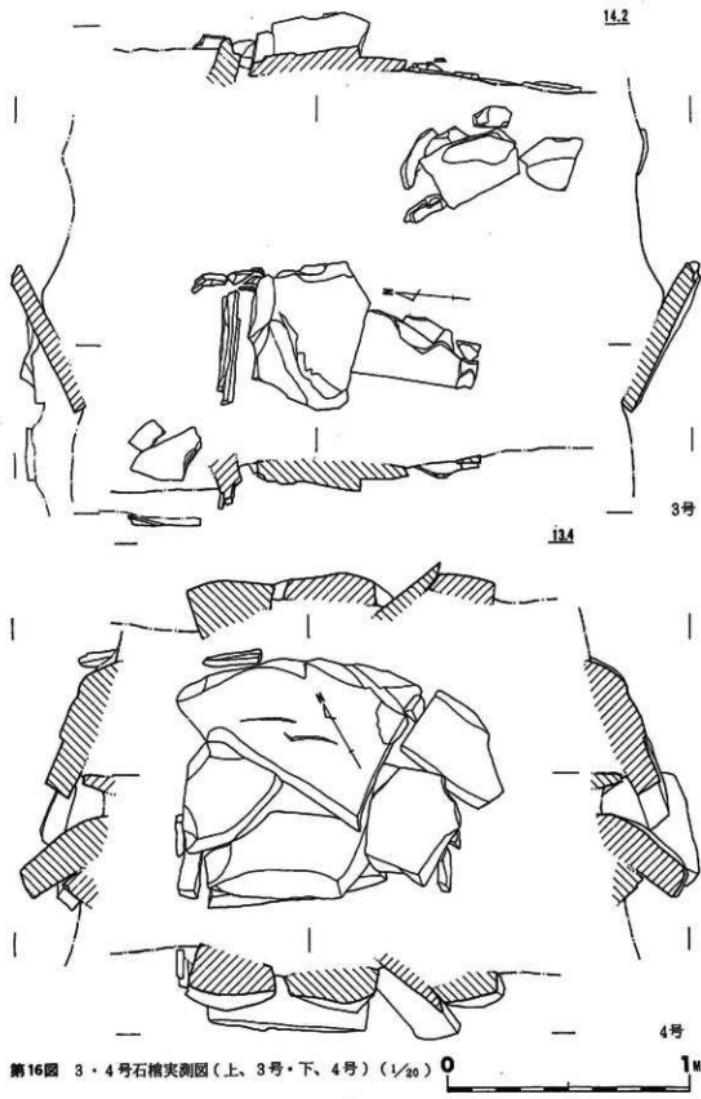
蓋石はすでに存在しない。北側石材が石棺内部へ「く」の字状に倒れ込んでいるが、比較的旧状を止めている。石棺主軸はN-68°Wで、現状で見る限り石棺小口石材の内側に側石材を組み込んで構築する。石棺内法長約75cm、幅約30cmを測る。

##### (3) 3号石棺（第16図）

蓋石材の一部が石棺を覆った状態で残っており、その下に北小口と東側石材が見える。石棺主軸はN-5°Wほどと考えられる。石棺石材がかなり風化している上に、周辺部には3号石棺のものと思われる石材が散在しており、相当壊れているものと考えられる。



第15図 1・2号石棺実測図(上、1号・下、2号)( $1/20$ )



第16図 3・4号石棺実測図(上、3号・下、4号) (1/20)

(4) 4号石棺（第16図）

割れているものの大型で厚みのある蓋石材が、棺身を覆った状態で残る石棺である。北側に傾斜する地点に位置するため、蓋石もやや北側にずれ落ち、棺身の一部が見られる。石棺の主軸はおそらくN-29°Wであろうと考えられる。

(5) 5号石棺（第17図）

蓋石が滑り落ちているが、棺身石材がほぼ残っている。2号石棺と同様に小口石材の内側に側石材を組み込んだものと考えられる。石棺主軸はN-22°Wである。

(6) 6号石棺（第17図）

蓋石材1枚と棺身石材数枚が残る。石棺主軸はN-65°Eほどであろうと考えられる。本石棺と7号石棺の間に蓋石Bがある。

(7) 7号石棺（第18図）

蓋石がなく、棺身石材も東小口および北側石材のみが残る。石材の風化が激しく、周辺に剥落した石材が散乱している。石棺主軸N-33°Wである。

(8) 8号石棺（第18図）

蓋石はなく、南側石材のみが原位置にあると考えられる。周辺に少量の石材が散乱し、隣接して蓋石Cもある。石棺主軸はおよそN-55°Eと考えられる。

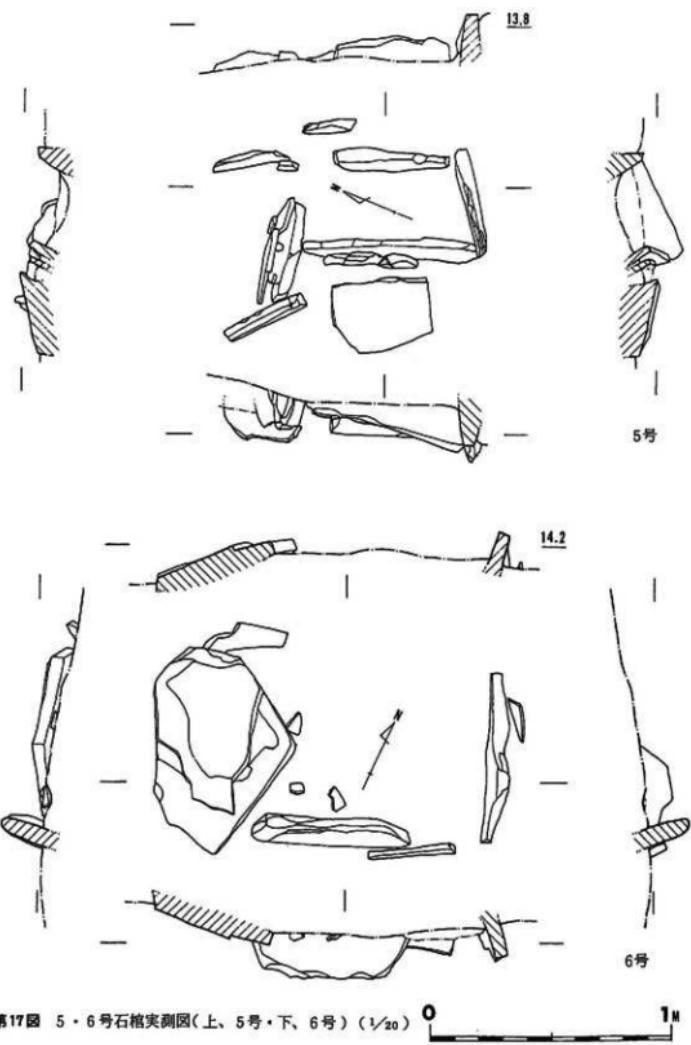
(9) 9号石棺（第19図）

4号石棺に隣接して位置する集石で、石棺としてのまとまりに欠けるが、ここでは仮に石棺として扱った。西側へ傾斜する斜面にあり、厚めの石材数枚からなる。あるいは4号石棺の石材かもしれない。一応、主軸を想定するとN-68°Eとなる。

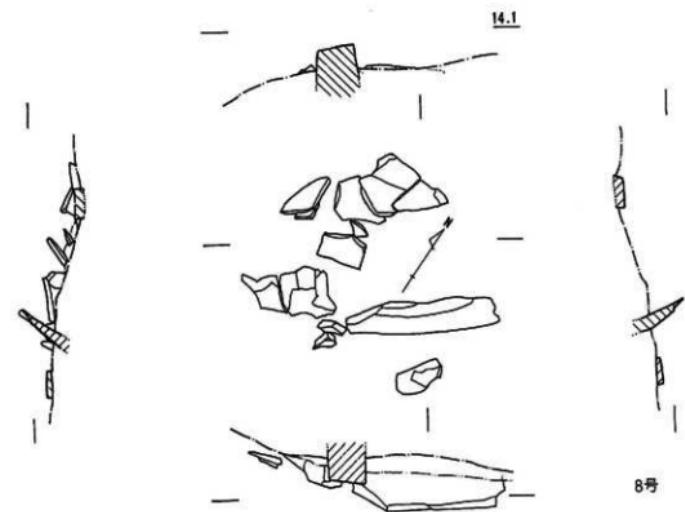
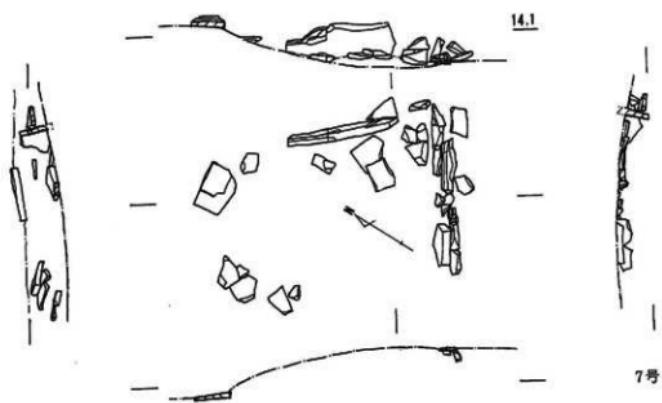
⑩ 蓋石材（第19図）

Aは1号石棺の近くにあったもので、海岸の浸食作用をうけている。同様の石材は本小丘下の海岸に広く分布している。最大長135cm・幅80cm・厚さ15cmあまりを測る。

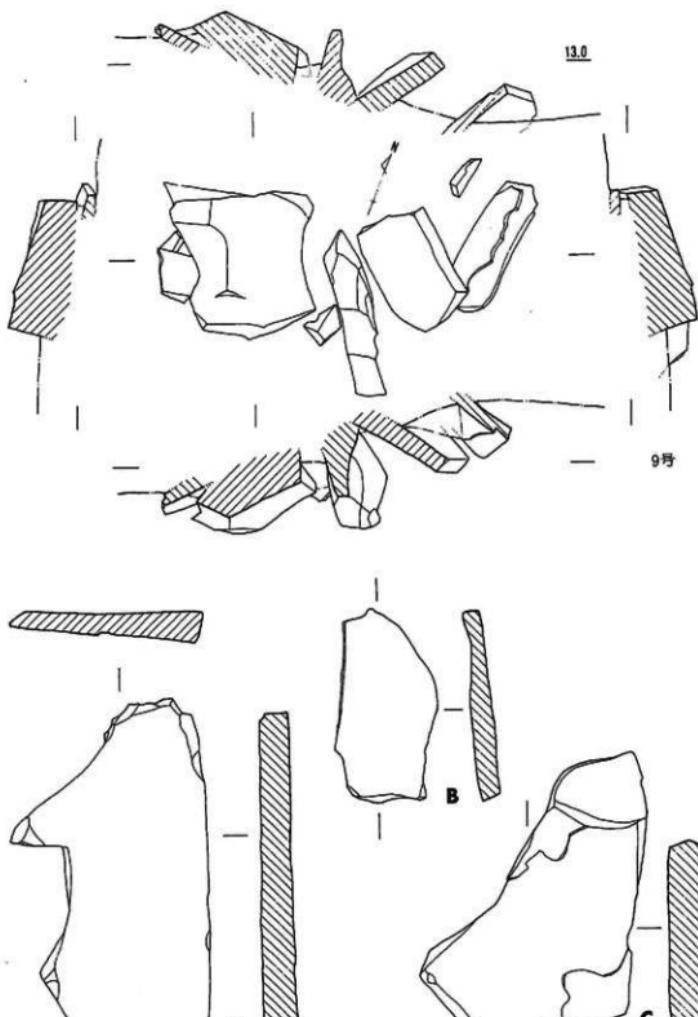
Bは小型で最大長80cm・幅40cm・厚さ10cmほどの平石材であり、Cは大型で最大長110cm・幅90cm・厚さ15cmあまりを測る。



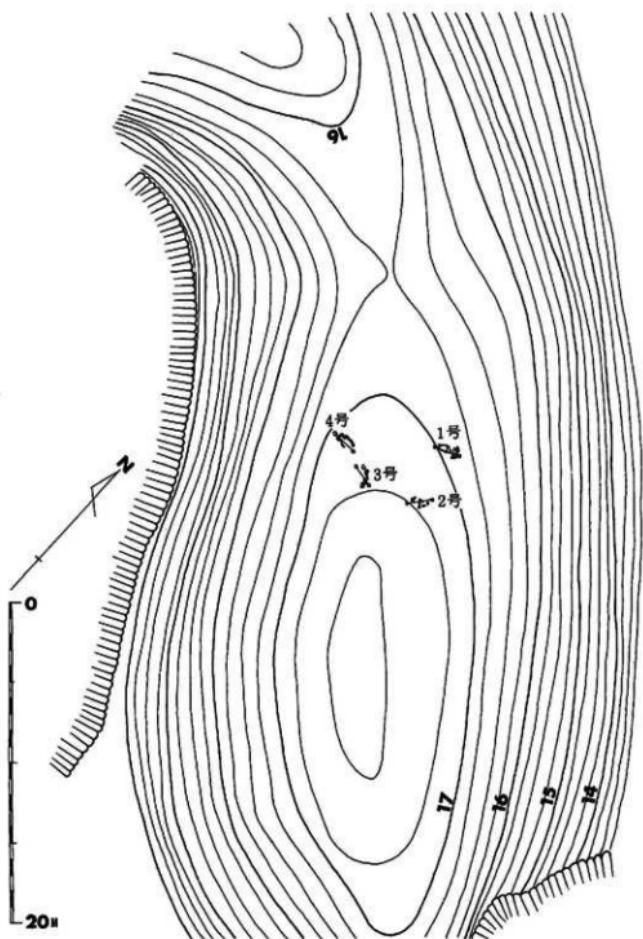
第17圖 5・6號石棺實測圖(上、5號・下、6號) (1/20)



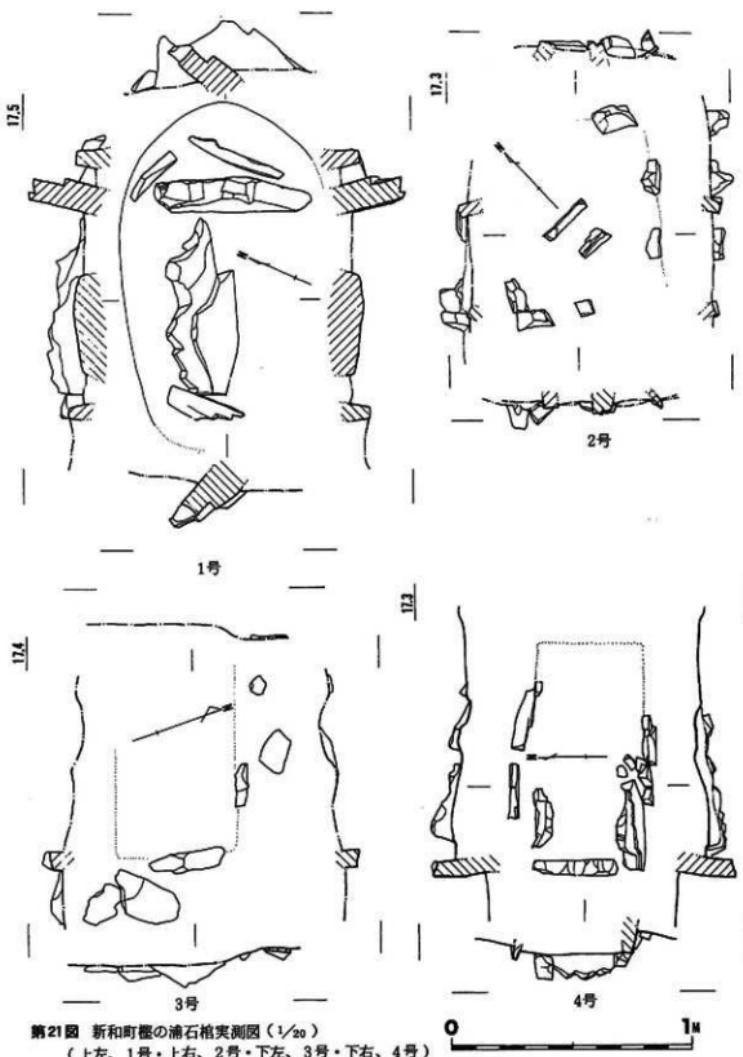
第18図 7・8号石棺実測図(上、7号・下、8号) (1/20)



第19図 9号石格・蓋石実測図(上、9号・下、蓋石)(1/20)



第20図 新和町程の浦石棺群地形測量図 (1/500)



第21図 新和町櫛の浦石棺実測図 (1/20)  
 (上左、1号・上右、2号・下左、3号・下右、4号)

## 5.まとめ

以上、述べてきた先尾串箱式石棺群の現状確認調査の成果についてまとめておきたい。

まず、先尾串箱式石棺群は箱式石棺 8 基・箱式石棺状集石 1 基・蓋石と考えられる石材 3 枚からなる石棺群であった。石棺群は海に望む小岬の突端部に形成された、独立小丘状の平坦部に築かれており、墓域としての明確な選択が行われている。石棺群の多くは長年の浸食によって棺身が露出するほどの状態になっており、ほとんど原形を止めていなかった。石棺であるとの判断にあたっては、棺身石材が地山に埋置されているもののみを石棺としたが、掘り下げを行っていないため、あるいは基數の増減があるかもしれない。

本石棺群に用いられた石材は、蓋石材を除けば長さ 50~60cm・厚さ 10cm ほどのものが多く用いられている。これらの石材の中には海岸の波による浸食を受けた形跡の見られるものがかなりあることからすれば、おそらくは小岬下の海岸あたりから調達されてきたものと考えられる。なお、これらの石材は割れたままの状態で用いられており、切り石加工された痕跡は見られない。

箱式石棺の形態は現状観察の限りでは小口部を 1 枚、側石部を複数枚の板石材で構築するもので、石棺の内法が計測できた 1 号石棺では幅 30cm・長さ 70cm、2 号石棺では幅 30cm・長さ 75cm あまりであった。箱式石棺の内法としては、幅に対する長さの比率が小さい点が特筆される。このような形態の箱式石棺は、実測図を掲載した新和町櫛の浦箱式石棺群（第 20・21 図）をはじめ天草各地に見られるようであり、今後の集成的な作業が必要と考えられる。

先尾串石棺群の構築時期に関しては、本調査が現状確認調査を目的とし、一切の掘り下げを行わなかったため、遺物その他の資料がなく、断定できない。周辺の聞き取り調査でも本石棺群から何らの遺物が出土した形跡はなく、これについても本石棺群および類例資料の増加に期待したい。

### （注）

従来、熊本県下では箱式石棺といふ墳墓形態について、漠然と弥生～古墳時代墳の所産と考えられてきた。しかし、天草諸島での類例をみると、これらの箱式石棺の群在する有り方などは同地域を含めた西南九州の、古墳時代に多く構築された地下式板石積み石室墓群に近似している。これら箱式石棺と地下式板石積み石室との関係については、今後稿を改めて検討を加えたい。

図 版



第2図版 (上) 茂木根横穴群東支群 2号現状 (下) 茂木根横穴群西支群 4号現状



第3圖版 (上) 茂木根橫穴群東支群 1 号完掘状况 (下) 東支群 1 号玄室

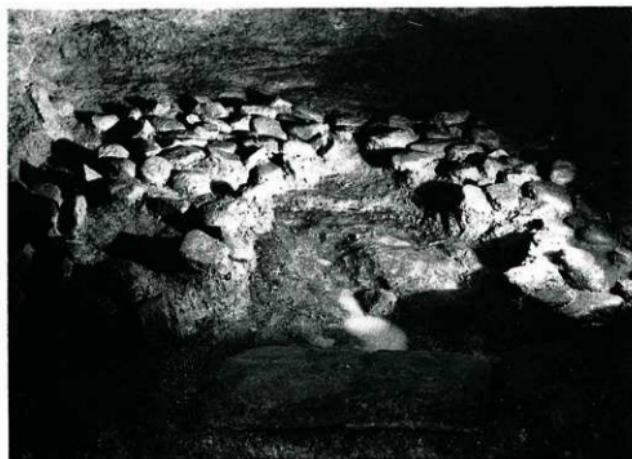
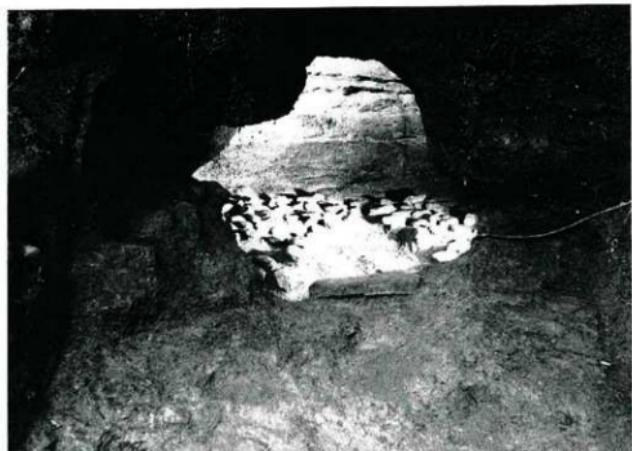
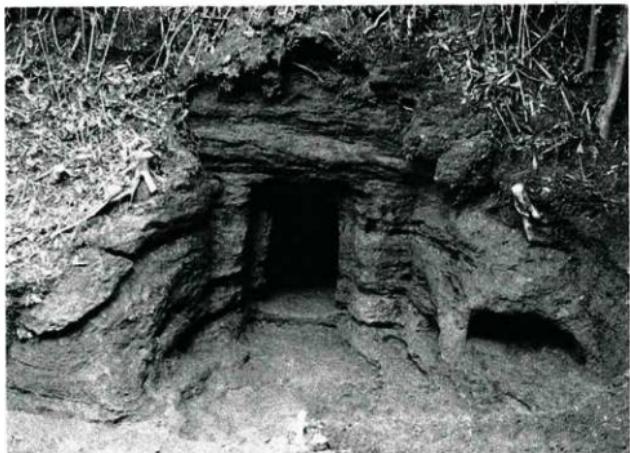
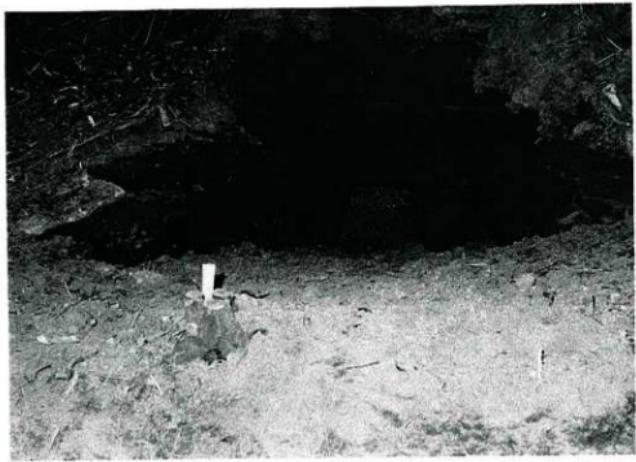


圖4回版 (上) 茂木根横穴群東支群 2号完體狀況 (下) 東支群 2号玄室敷石



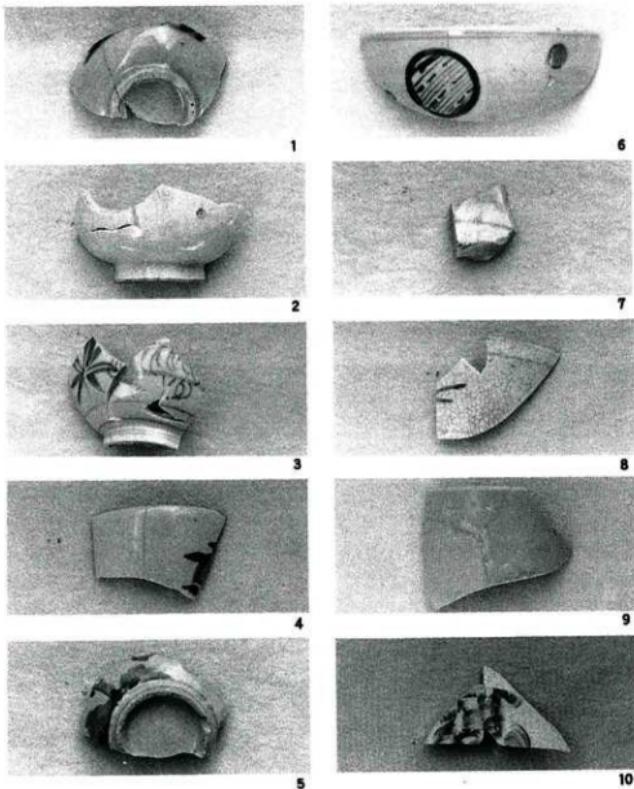
第5圖版 (上) 茂木根模穴群西支群 4號完掘狀況 (下) 西支群 4號玄室床面與壁側



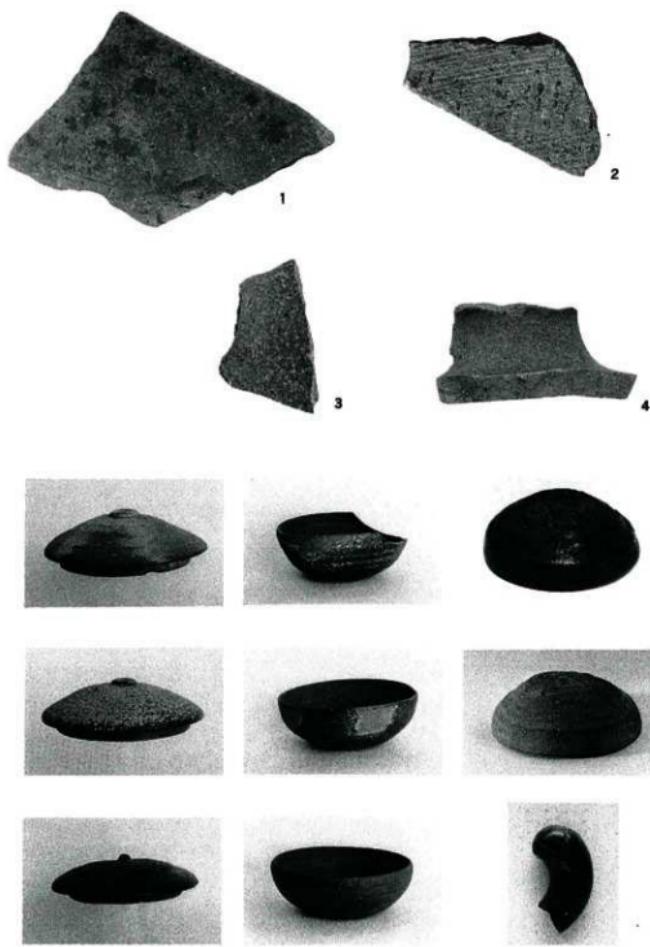
第6図版 (上) 茂木根模穴群東支群埋め戻し状況 (下) 西支群4号埋め戻し状況



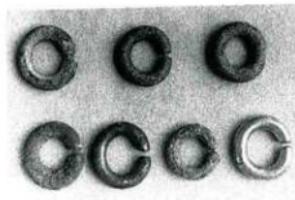
( 2 号横穴出土須恵器 )



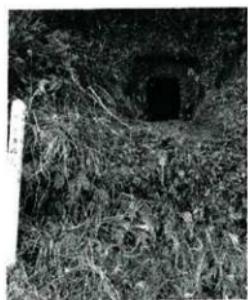
第 7 図版 茂木根横穴群出土遺物 ( 番号は実測図に同じ )



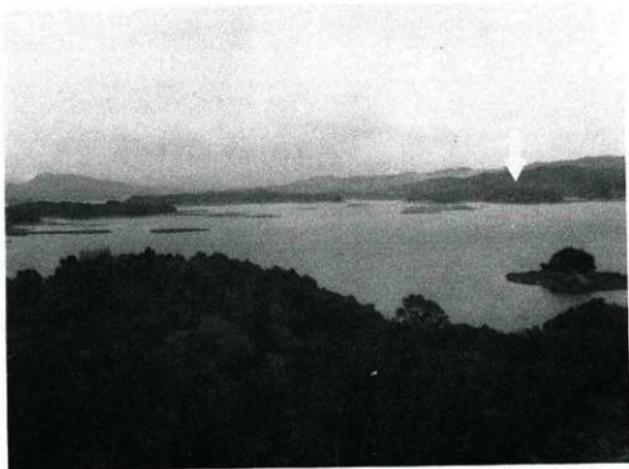
第8図版 明照平鬼塚古墳(1~4)(番号は実測図に同じ)、善平横穴、丸尾ヶ丘遺跡出土遺物



第9図版 田畠横穴造景および出土遺物



第10図版 (上) 松島町馬場横穴遠景・近景 (下) 長島町浜渡横穴遠景・近景



第11回版 先尾串石棺群遠景・近景



1号



6号



2号



7号



3号



8号



4号



9号



5号



第12図版 先尾串石棺群確認状況  
石棺1～9・蓋石A B C



第13回版 新和町櫻の浦石楠群遠景・近景



1号



2号



3号



4号

第14回版 新和町櫻の浦石棺群確認状況 1号～4号

## あとがき

本渡市文化財調査報告書第5集として、先尾串石棺群現状確認調査(59年度)と、茂木根横穴群確認調査(61年度)の調査報告書をお届けします。

天草島内に所在する埋蔵文化財の考古学的調査は、他地域に比べると非常に少なく、基礎的資料の集成が必要とされています。今回の調査は、こうした現状をふまえ実施しその報告をまとめました。

最後にこの調査に際しご協力いただいた多くの方々に感謝とお礼を申し上げます。

本渡市教育委員会

本渡市文化財調査報告書 第5集  
茂木根横穴群確認調査報告書  
(附 先尾串箱式石棺群現状確認調査報告書)

発行 昭和63年3月31日  
発行者 本渡市教育委員会 教育長 吉野隆三  
発行者 本渡市教育委員会  
〒863 熊本県本渡市東浜8番1号  
TEL (0969) 23-1111  
印刷所 イナガキ印刷